

ようこそヤンデレ幼馴染  
染がいる教室へ

御米粒

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

転生特典で櫛田の幼馴染になったオリ主が同じく転生特典で得た予知夢の能力を使ってBAD ENDを回避するために頑張るお話

# 目次

1話	幼馴染は櫛田桔梗	1
2話	僕はリア充	30
3話	桔梗のスクール水着	46
4話	BE WITH YOU	62
5話	僕の恋愛講座	77
6話	僕と桔梗の勉強会	99
7話	独占欲	113
8話	冴えない堀北の育て方	127
9話	一之瀬の過去	148
10話	桔梗の本気	174
11話	夏の憂鬱	190
12話	ストーリー	205



# 1話 幼馴染は櫛田桔梗

最寄り駅の階段を転げ落ちたと思ったら、窓もドアもない、壁一面真っ白な部屋にいた。

「いったいここはどこなんだろう？」

病室かと思ったが部屋には何もないので違うだろう。

わかっているのは、僕が気を失っている間にこの部屋に運ばれたということだけ。

「ようやく目が覚めましたか」

「うわっ!？」

いきなり目の前に美女が現れた。

「初めまして、サクラバカネ桜庭要さん」

恐らく世間の人々も人形以外には見た事のないであろう絶世の美女だ。

「は、初めまして……」

「はい、いきなりですが私は神です」

「……………え？」

「神です」

絶世の美女なのに頭の中は残念な人のようだ。

天は二物を与えずは本当だったんだ。

「失礼ですね！ 私は残念ではありません！」

頬を膨らませて美女が詰め寄ってきた。

怒らせてしまったようだけど、見惚れてしまい、謝罪の言葉が出てこない。

「……ですが仕方ないでしょう。いきなり神と言われても信じられませんよね」

「は、はあ……」

「それでは順を追って説明しますね」

神様曰く僕は階段を転げ落ちた際に頭を打ってしまい死んでしまったらしい。

情けなさすぎる。

なぜなら階段を転げ落ちた原因が——ゴキブリに驚いて階段を踏み外したからだ。

「そ、そんな落ち込まなくて大丈夫ですよ！ もっと間拔けな死に方をした人もいるん

ですから！」

跪き頭を垂れると神様が励ましてくれた。

神様によると、19歳なのに餅を喉に詰まらせて死んでしまったお馬鹿さんがいるら

しい。

その話を聞いて、亡くなった人には悪いけれど、少しだけ救われた気がした。

だが自分の死を受け入れるのには時間がかかった。

恋人はいなかったけれど、家族や友人に恵まれて幸せな人生を送っていたと思う。

16歳で人生を終えると思っていなかったので、死を受け入れるまで30分以上かかった。

「すみません。もう大丈夫です」

「無理しなくていいんですよ？」

「いえ。これ以上悲しんでもどうにもならないですし」

無理やり気持ち切り替えた。

これで彼女がいたら倍以上は時間がかかっていたと思う。

「そうですね。それでは桜庭さんのこれからについて説明しますね」

神様が現れてから、もしやと思っていたが、僕は転生することになった。

転生先は決められているようで、死者が最後に視聴もしくは閲読した創作物の世界と  
のことだ。

「桜庭さんの転生先は『ようこそ実力至上主義の教室へ』です」

「よう実ですか」

「はい。……不満ですか？」

「いえ。比較的平和な作品に転生できるので安心してます」

本当によう実でよかった。とあるシリーズや東京喰種、ゴブスレが転生先だったら転生を拒否していたと思う。

よう実に関しては、原作小説、コミカライズ、堀北√、アニメとすべて制覇しているので、知識は問題ないはず。

「そうですか。それでは続いて転生特典を3つ与えますのでガチャを回してください」

「3つもくれるんですか!？」

「はい」

「ホワイトですね」

なかには特典なしで転生させられる異世界転生作品もあるというのに。

「なんか現代的ですね」

神様にスマホを渡される。

「それじゃ回します」

せつかくの特典なんだ。

なるべくチートな能力が欲しい。

「これは……!」

一つ目の特典は『予知夢』だった。

「レアな特典を得られましたね」



予知夢は正夢の一種だ。正夢の中でも『未来の何かを暗示するメッセージ性を持った夢』を指す。

この特典なら原作と展開がかけ離れても問題なさそうだ。

「はい。二回目、回しますね」

二つ目の特典は『ヒロインと幼馴染になれる』だった。

どうやら僕はガチャ運がいいようだ。

「それではよう実のヒロインで誰が幼馴染になるかルーレットを回しますね」

よう実は可愛いヒロインが多いので誰が幼馴染になってもウエルカム——いや、櫛田は勘弁してほしい。

櫛田は自身の過去を知る堀北を退学させる為に、クラスを裏切ったり、龍園と手を組んだりする悪女だ。

さらに最新巻ではBクラスの面々に下剤を仕込んでいた。

正直、関わりたくないヒロインナンバーワンだ。

「幼馴染は櫛田桔梗に決まりました!」

「嘘でしょっ!?!」

サブヒロインも含めて10人以上いたのに、寄りによって櫛田が幼馴染になってしまった。

これは詰んだかもしれない——いや、幼馴染になっただけで、彼女が僕に好意を持っているとは限らない。

小さい頃は仲良くても、高校生になったら一言も話さなくなるといふのはよく聞く話だ。

ならば頑張つて、ほかのヒロインと関係を築けばいいんだ。

僕はそう自分に言い聞かせた。

「あの、3回目を回してもらってもいいですか？」

「あ、はい」

3つ目の特典は『紳士服』だった。

僕のがチャ運も尽きてしまったらしい。

「それでは特典も揃いましたので」

「いよいよ転生ですか？」

「榊田桔梗との思い出をインプットします！」

「え？ いたっ！ 頭が割れるように痛いっ！」

神様がパソコンでタイピングすると、直後に激しい頭痛が僕を襲った。

頭の中に榊田との疑似記憶が埋め込まれていく。

「痛いっ！ 胸がっ！」

のたうち回っていると、今度は左胸に激痛が走った。

頭痛と違う種類の痛みで、燃えるように熱くて痛い。

「ふう、完了しました」

10分ほどして神様の作業が完了した。

僕はあまりの痛みで、つい神様を睨んでしまう。

「そ、そんな怒らないでくださいよっ！ 人間関係の特典は疑似記憶を与えないといけないルールなんです……」

「……そうでしたか」

「クレームは特典課にお願ひします」

「部署が違うんですね」

「はい。それよりそろそろお時間です」

「わかりました。神様、お世話になりました」

僕は深々と頭を下げた。

「いえ。頑張ってくださいね」

「はい！」

「それでは、いってらっしゃいませ」

「いってきます！」

☆☆☆

大量の光に包まれたと思ったら、気づくと下駄箱の前にいた。すでに学校に到着しているので、バスのイベントは省略されたようだ。

「よし、教室に行こう」

自分がどこのクラスに所属になったかすぐにわかった。

なぜなら下駄箱にクラス、出席番号、氏名のプレートが貼ってあったからだ。

「まだ誰も来てないんだ」

Dクラスの教室には、誰一人姿は見られなかった。

すぐに座席表を確認すると櫛田とは離れた席であることがわかった。

一安心した僕は監視カメラの設置場所を確認することにした。

監視カメラは天井に埋め込まれていたり、備品に隠されていたり、なるべく生徒に見つからないよう工夫していることがわかった。

「うーん、少なくとも20台は設置されているな」

「ひっ」

「え」

机の上上がり、監視カメラの設置場所を確認していると、一人の女子生徒が教室に入ってきた。

「あ、驚かせてごめんね」

「い、いえ……」

女子生徒の名前は佐倉愛里。

その正体はグラビアアイドルの雫であり、主人公である綾小路清隆に思いを寄せる美少女だ。

「僕の名前は桜庭要。よろしくね」

「は、はい……。よろしくお願いします……」

佐倉は僕を目を合わせないようにしながら自席に座った。

彼女のコミュニケーションのなさは知っていたが、こうも避けられるとショックだ。

自席に座りしばらくすると大勢の生徒が教室にやってきた。

僕は櫛田に気付かれないように寝ることにした。

もちろん茶柱先生が来たらすぐに起きるつもりだ。

10分ほどして茶柱先生が教室に入ってきた。

(谷間アピールしすぎだろ！)

茶柱先生は原作と同じで谷間をアピールするスーツ姿だった。

美人である茶柱先生の登場に大勢の男子生徒が色めき立つ。

(とりあえず目立たないように質問は控えよう)

目立つと僕の存在が榎田に知られてしまうことになる。

僕は教壇に立って説明してる茶柱先生の話を黙って聞くことにした。

話の内容は原作やアニメと同じで、特に気にする内容ではなかった。

茶柱先生は説明を終え、質問者がいないことを確認すると、すぐに教室を後にした。

僕の前列前の席では綾小路と堀北がいちやいちゃしている。

これは池たちに付き合っていると勘違いされても仕方ないと思う。

(さて、自己紹介が提案される前に逃げるかな)

そろそろ平田が自己紹介を提案する頃だ。

僕は幻のシックススマン並みに気配を消したつもりで教室を後にする。

誰一人声を掛けられることもなく、無事に廊下に出ることに成功した。

「よし」

教室からの脱出に成功して油断しきっていた僕は背後から近づいてくる女子に気付かなかった。

「久しぶりだね、要」

「うっ……!!」

後ろを振り向くと、そこには僕の幼馴染になった榎田が立っていた。

「く、榎田……」

「やだな。昔みたいに枯梗でいいよ」

僕が榎田と距離をとろうとした理由。

それは榎田が僕に異常なまでの好意を向けていることを知っていたからだ。

僕と榎田は0歳の頃からの付き合いだ。

両親同士が仲が良く、上杉家と浅倉家と同じような付き合いだったらしい。

榎田が僕を好きになったのは小学四年生の時だ。

近所の家から脱走した土佐犬に襲われそうになった榎田を僕が傷を負いながらも助けたことになっている。

それ以来、榎田は僕を一人の男性として見るようになり、小学生ながら僕たちは付き合い合うことになった。

付き合い合うといっても小学生だったので、セックスはしていない。……していないけれど、榎田は歪んだ愛情を僕にぶつけていた。

二人に転機が訪れたのは小学六年に進級する直前の春だった。

父親の転勤で僕は東京から北海道に移住することになり、榎田と離れ離れになったのだ。

お互い携帯を持っておらず、引越し先では固定電話を引かなかつたため、僕と榎田が連絡しあうこともなくなつた。

そして四年の月日が流れた。

これが神様によつて与えられた僕と榎田の疑似記憶だ。

「まさか要と同じ学校に通えるなんて……。やつぱり私たちつて運命の赤い糸で結ばれているんだね」

「そ、そうかもね……。あはは……」

「うん。それより酷いんじゃないかな？」

「え、なにが……？」

「私があんな熱い視線を送っていたのに……。要つたら、まったくこつちも見てくれないんだもん」

気付いてたよ。

怖かつたから知らないふりをしていただけだよ。

「それは……」

「言わなくてもわかるよ。久しぶりに会つたから照れてたんだよね」

「え……？」

「大丈夫。私、要のことならなんでもわかるから」



このままだと櫛田ヤンデレルートにまっしぐらなんですけど。

「ねえ、今からクラスのみんなで自己紹介をするんだって。要も教室に戻ろう」

「……そうだね」

「手繋いでもいい……?」

「……いいよ」

断ったら何をされるかわからない。

そんな気がして僕は差し出された手を握った。

「それじゃ行こうか」

「うんっ」

僕が櫛田と呼んだ時の彼女の表情。

それは病んでる時の桂言葉そのものだった。

☆☆☆

入学式を終えた僕は桔梗や平田たちとファミレスで食事をするようになった。

ちなみに自己紹介は無難に終わった。

桔梗が僕を彼氏だとみんなに紹介するかと思っただけど、そんなことはなく、原作と同

じような自己紹介をしていた。

ファミレスで食事を済ませると、軽井沢の提案でカラオケに行くことになった。

カラオケでは隣に座った佐藤と松下にやたらと絡まれた。歌う曲もリクエストされ、キンプ○や米津○師など流行の曲を歌わされまくった。

ほかの女子と絡むと桔梗が不機嫌になるかと思っただけ、終始笑顔で聞き役に徹していた。

彼女がヤンデレに見えたのは錯覚だったかもしれない。

もしかしたら他のヒロインルート開拓もいけるのではないか。

そんな淡い期待を抱いてカラオケはお開きとなった。

だがそんな淡い期待はもろくも崩れ去ることになる。

みんなと別れた僕は敷地内の施設を巡ることにした。

原作で無料の商品が販売されていることを知っていけれど、直接この目で確認したかった。

そそくさと集団から離れようとすると、桔梗と一緒に回ってもいいかとお願いをしてきた。

最初は断ろうとしたが、上目遣いで可愛くお願いをされてしまったので、つい首を縦に振ってしまった。

スーパー、コンビニ、ドラッグストアと無料の商品が販売しているようなお店を次々と回った。

気づくと時刻は18時を過ぎており、桔梗の提案で喫茶店で夕食を済ませることにした。

夕食を食べ終え、寮に帰る道中で桔梗が部屋に上がりたいと懇願してきた。

さすがに入学初日から手を出してこないだろうと思ひ、僕は了承してしまった。これが間違いだった。

「久しぶりだね、要とこうするの」

現在。僕は上着を脱がされた状態で桔梗に抱きつかれている。

彼女は僕の左胸にある傷跡を愛おしそうに撫でたり、頬ですりすりしたり、舐めたりしている。

「私と要の愛の証」

この傷跡は土佐犬から桔梗を庇った際に負ったものになっている。

桔梗にとってこの傷跡を愛でるのが日課だった。

これを小学五年から離れ離れになるまで毎日行っていた。

「少しは薄くなったのかな」

先ほどから抱きつかれている為、つぶれた乳房が悩ましい感触で、僕の腹部や胸板を

襲ってくる。

「もつと感じあいたい」

そう言うのと、桔梗はブレザーを脱ぎ、ブラウスのボタンを外しだした。慌てるでもなく急ぐでもなくひとつひとつ外していく。サイズが小さいのか、ブラウスはボタンをひとつ外すたびにプツプツとひとりでに開き乳房が外にせり出して来る。3つほど外した頃にはオレンジ色のブラがすっかり外に露出していた。

「ちよつ……」

「これならもつと感じあえるよね」

先ほどより生々しい感触が僕を襲う。

桔梗は豊富な乳房を押し当てながら、傷跡を美味しそうに舐める。

「ひゃっ」

「要、感じてるの?」

「くすぐりたいの……!」

断じて感じてない。

女子に舐められて感じてしまう性癖は持っていない。

「そっか。そういえば昔も舐めると変な声上げてたもんね」

ぺろぺろと唾液を傷跡に染み込ませるように舐め続ける桔梗。

これを小学生の頃からしていたのだから、とんだ変態さんである。

「桔梗、そろそろ……」

「やだ」

「そこをなんとか……」

「だめ。だって四年も待ったんだよ？」

そんな涙目で見つめられても困るんですけど。

そろそろリトル要が反応してしまう。

「ずっと、ずっと、要と会えるのを待ってたんだもん……。もつと要を味わいたいよ

……」

僕を抱きしめる力が一層強くなった。

「だからもう少しだけ」

桔梗は傷跡を愛撫し続けた。

どれくらいそうしていたかわからない。

とうとう桔梗が僕の息子が反応していることに気付いた。

「要、おつきくなってるね」

「い、いや……」

「私に興奮してくれてるだよね。嬉しいっ……!」

そりゃこんな魅力的な身体に抱き着かれていたら興奮するよ。

「私、魅力的な身体になったでしょう?」

「……そうだね」

「要のために努力したんだよ」

「僕のため?」

「うん。要が満足してくれる身体になるためにいろいろと頑張ったんだよ」

「そうなんだ……」

「そうだよ。……だからいいよ……?」

「え……?」

「私のこと好きにしているよ」

桔梗は僕の耳元に顔を近づけ、蠱惑的で艶やかな声音で吐息をわざと耳にかける様に呟いた。

「す、好きにして……」

「うん。私は要のものだから。好きにしているんだよ……?」

蠱惑的な声。甘美な刺激に脳が沸騰していき、正常な判断能力が失われていく。

下着越しに伝わる彼女の柔らかな体温、誘惑する言葉に、否応なく心臓を高鳴らせ、欲情を募らせてしまう。

「桔梗……!」

「きゃっ」

気づくと僕は桔梗を押し倒していた。

「要……」

真つ赤な顔で瞳をうるうるさせながら僕を見上げてくる桔梗。

(やばい。超可愛い)

そうだった。

僕がよう実の原作を購入したきっかけは桔梗だったのだ。

原作2巻の表紙の桔梗に惹かれて僕はよう実を知ることになった。

桔梗の容姿はどストライクだ。

中身は好ましくなかったけれど、僕を見上げる桔梗の性格は改変されている。

僕を病的なまでに愛している美少女だ。

だったら我慢する必要なんてない。

桔梗に手を出しても後悔することなんてないじゃないか。

「んむっ……!?!」

すっかり理性を失った僕は桔梗の唇を奪った。

僕にとってのファーストキスだったけれど、貪るようなキスをしてしまった。

桔梗は嫌がることなく、腕を僕の首にまわし、ねっとり唇を押し付ける。

「んっ、んむむ……んんっ、ふぁ……」

生まれて初めて味わう女の子の唇は、驚くほど柔らかな感触だった。

「んちゅ……んむっ……んんっ……」

何度となく唇を重ね、少し休んではまた唇を押し付けあう。

そんなキスを繰り返し、僕は彼女の口内を犯し始めた。

「んっ……ぢゆるっ……んむう……」

最初は手探りで舌を絡めたけれど、時間が経つにつれて自然と舌を絡ませていた。桔梗の歯並びを確認し、舌の動きを追っているうちに、もう何がなんだかわからなくなってくる。ただ気持ちいいという感覚だけが今の僕だった。

「ぶぁっ……はぁはぁ……」

背中をポンポンと叩かれ、息切れを知らせていると気づいた僕は唇を解放した。

桔梗は息を切らし、涎を垂らしながら、蕩けた表情で見上げてくる。

「……っ！」

桔梗の淫らな顔だけじゃない。大きく盛り上がった、ぷるんと柔らかかそうな二つのふくらみ。こんなの、目にしちやったら手を出したくなってしまう。

「あっ、あぁっ……っ！」



僕は興奮を抑えきれず、ブラ越しに胸をふわっと触れて揉み始める。

「か、要……んあつ」

円を描くように胸を揉むと、桔梗はビクンと身体を震わせた。

「すごい柔らかい……」

「んっ……な、生だともっと柔らかいよ……あつ！」

「……そうなんだ」

僕は桔梗に誘われるようにブラを上をにずらし、乳房をあらわにする。

すると形がよくて大きなおっぱいが、ぶるんと揺れながら僕の目の前に現れた。

よくピンク色の乳首なんて言うけれど、ここまで綺麗な色をしているのは珍しいん

じゃないだろうか。

小さめの乳輪に、ちよつぱり尖った突起がついている。

「んっ、あつ……す、吸っちゃうんだ……？ ふあ、んっ、んん……っ」

僕はこらえきれず、すぐにその乳首にむしやぶりついた。

おっぱい全体を口内に頬張り、舌先で乳首を舐め回し、いやらしい音を立てながら吸

い上げる。

「はあんっ♡ たーんと吸ってね……♡」

僕は夢中になって桔梗のおっぱいを心ゆくまで味わった。

僕に貪りつくされた桔梗の乳房は僕の唾液塗れになっており、乳首は腫れているのか先ほどより大きくなっていた。

「それじゃそろそろ……」

いまだに興奮が収まらない僕は桔梗のスカートを捲った。

するとびしょ濡れのショーツがあらわになった。

「すごい濡れてるんだね」

「あ、あんなにしつこくおっぱい責められたら……こうなっちゃうよ……」

濡れ具合を言われ、恥ずかしいのか、そっぽを向いてしまう桔梗。

そんな桔梗をもっと見たいと思い、程よい肉付きが堪らない身体を容赦なく攻め立てることにした。

「あつ、んあつ、ああつ♡ 要、もっと……もっとお……♡」

僕はもっと愛液を分泌させるべく、桔梗の唇を、胸を、乳首を、秘部を、太ももを、全身を余すことなく手と唇で責め続ける。

「ひいあつ♡ 要、いい……そこ、いいよお……♡」

さつきから桔梗は何度も絶頂している。

あまりにも簡単にイってしまっているの、もしかして壊れてしまうんじゃないかと心配になるくらいだ。

とはいっても、心配になりながらも僕は桔梗への愛撫をまったくやめられない。

「あつ、ああつ、イっちゃう♡ またイっちゃうよお……♡」

「いいよ、イって……」

くちゆくちゆと音を立てながら、桔梗の秘部を指で掻き乱す。

「ひいああああああああつ♡」

直後に、桔梗は歓喜の声を発しながら、豪快に潮を噴きだした。

「あつ、うあ……ああ……要、もう……お願い、だから……」

「それじゃ……あつ、でも……」

コンドームがないことに今さら気づく。

ドラッグストアで買っておけばよかった……。

「だ、大丈夫……いいから……」

僕の疑問をすぐに察したのか、桔梗はこくと頷いた。

「わかった。挿入れるよ」

「……うん」

僕は桔梗の両足の間に割って入った。細い足を左右の両脇に抱えながら、桔梗の股間を見下ろす。

桔梗の秘部は愛液でしっかりと濡れている。

勃起した陰茎を小陰唇に添えると、両脇に抱えている桔梗の足から緊張が伝わってきた。無意識のうちに膝に力を入れているようだ。

僕、桔梗の両足から手を離し、ペニスの根元を掴んで支えながら、腰を前へ進めていった。

亀頭が陰唇を掻き分け、膣口に沈んでいく。

「あつ……ぐううつ……!」

桔梗は眉を歪めて、小さな悲鳴をあげた。

「大丈夫……?」

「う、うん……大丈夫だから、最後まで入れて……」

「ゆっくり入れるからね」

僕は優しく言いながら陰茎を押し進めた。

「んっ……がつ、んんっ……はぁ、はぁあつ!」

長い時間を掛けてペニスを根元まで埋め込んでいく。

そしてとうとう桔梗の処女膜を突き破った。

「ひぎいいいいつ……!」

あまりの激痛に、桔梗が大きく悲鳴を上げた。

そんな桔梗とは反対に、美少女の処女地に包まれて、僕の肉棒は悦びに満たされてい

た。

「奥まで入ったよ」

「う、うん……。要のが入って……。あぐつ……。！」

桔梗は眉間に皺を寄せながら肩で息を弾ませる。

「動かすのは待った方がいいよね？」

「……少しだけ待ってくれる？」

「もちろん」

理性を失った僕でも、激痛に耐える桔梗を無視して腰を動かしたりはしない。

苦痛の表情を浮かべている彼女に構わずピストン運動を始める者がいるとすれば、その人は悪魔だろう。

「あ、痛いけど、大丈夫、だよ……」

痛そうな顔をしながら桔梗は言った。

実際 痛みに襲われているのだろうが、僕が動かないことにはずつとこのままだと分かっているだろうし、最初からある程度の痛みは覚悟していたと思う。

僕は慎重に腰を引いた。

根元まで埋まっていた肉棒が、膣壁を擦りながら抜け出ていく。

蕩けるような快感を得ている僕とは対照的に、桔梗は唇を硬く結んでいた。

「ふあつ、ああつ……あんつ！」

僕が腰を突き出すたびに、桔梗の豊富な乳房が揺れる。

こうして揺れているのを見ると、やはりたまらないものがあつた。

自然と腰の動きにも力が入ってしまう。

「んあつ、あつ、ひいんつ……んあああんつ♡」

徐々に痛みが引いてきたようで、桔梗が嬌声を上げ始めた。

「あひいつ♡ 気持ちいい、気持ちいいよお……♡」

膣穴の内部は狭苦しく、肉棒が無理やりに押し通っている感じすらあるけど、濡れているおかげか、あまり窮屈な感覚はしない。

陰茎を包み込んでくるような膣壁のうねりは、僕の快感を高めた。

「桔梗、きつくて気持ちいいよ……！」

「ああ……嬉しいっ！ 要に気持ちよくなってもらえて嬉しい……！」

僕は夢中で腰を振り続ける。

ぐちゅぐちゅと結合部から漏れる水音と桔梗の甘美の声が部屋の中に響く。

「ふあつ♡ あんツ♡ あああつ♡」

いつの間にか桔梗は舌をダランと出しながらだらしな顔をしていた。

「桔梗も理性崩壊しちゃったんだね」

「んふあ♡ あつ、あつ、あつ、あんっ♡」

桔梗は僕の問いに答えず、ただ淫らな声をあげるだけだった。

本当に理性が崩壊しているようだ。

「くはっ♡ あつ、んっ♡ はあんっ♡」

ピストンをすればするほど下品な喘ぎ声でヒステリックなほど感じまくる桔梗。

自然と射精感が高まっていった。

「あつ♡ あふっ♡ ひいあつ♡ んあああッ♡」

「桔梗、もうやばいっ……!」

「うんっ、私もずつとやばいからっ♡ だから一緒に……いひいいっ♡」

容赦ないピストンにより言葉が途切れたが、桔梗と一緒に果てたいことはわかった。

「わかったよ、一緒にイこうっ!」

ピストンするたびに揺れていた二つの大きな果実を鷲掴みにする。

「ひゃああああんっ♡」

僕は桔梗の乳房を握りながら、果てるために、抽送をより激しくする。

「うっ、桔梗……!」

抽送するにつれて、絶頂に近づいているのがわかった。

そして、とうとう僕の肉棒から欲望を吐き出された。

「あああああああつ♡」

処女肉を犯していた肉棒から大量の精液が放出される。

桔梗は絶頂で潮を噴きながら、白濁液を受け入れる。

「ふわあああつ♡ 熱いつ♡ 要の熱いのがたくさん入ってきてるっ♡」

種付けされて甘美の声をあげる桔梗。

そんな彼女の処女肉は、限界まで精子を絞り取るように、締め付け続けている。

「はああ……やつと、要に処女を捧げられたよあ……」

精液をすべて出し終えると、桔梗は繋がったままそう言った。

「うん、桔梗の処女もらっちゃった」

「……嬉しい?」

「もちろん」

「気持ちよくなってくれた?」

「さつきも言ったでしょ」

「もう一回言っただほしい」

「気持ちよかったよ」

「よかった。……ねえ、しばらくこのままでもいいよ……?」

「いいよ」



僕たちは繋がったまま抱きしめあった。

初めてのセックスは思ったより体力を奪ったようで、いつの間にか僕たちは眠りについていた。

起床したのは0時を過ぎた頃だった。

僕たちは一緒に風呂に入り、液体塗れの身体を清めた。

風呂から上がり、髪を乾かすと、桔梗の提案により彼女の部屋に行くことになった。

理由は僕のベッドのシーツが汚れていたからだ。

けれど桔梗の部屋に移動した意味はなかった。

なぜなら二人とも欲情してしまい、再び身体を重ねてしまったからだ。

僕たちは体力の限界を迎えるまで互いの身体を貪りあった。

## 2話 僕はリア充

夢を見た。

それは生々しい夢だった。

僕は浴室でスクール水着姿の桔梗を抱いていた。

正常位、騎乗位、後背位と様々な体位で桔梗の膣を肉棒で突きまくっていた。

桔梗は昨晚見せてくれたような、だらしない顔をしながら喘いでいた。

水着に大量の精液を浴びせたところで、僕の意識が覚醒した。

「はっ……!」

なんてセクシナルなドリームを見てしまったんだろう。

動揺しすぎてル〇語になってしまってるじゃないか。

「要、起きたんだ。おはようっ」

制服の上にエプロンを着た桔梗が視界に入った。

「おはよう」

「今から朝食作るからシャワー浴びてきたら?」

風呂上がりにも何度も性交したので僕の身体は乾いた体液でかびかびになっている。

「桔梗はもう浴びたんだ？」

「うん。タオルも出してあるから」

「ありがとう」

風呂場に向かうべく起き上がると桔梗の視線が僕の下半身に集中する。

「ふうん。昨日あんなにしたのに元気だね」

「いや、違うんだよ……！」

あんな性的な夢を見てしまったらこうなるのは仕方ないじゃない。

あれで勃たなかったら、性器反応不全だよ。

「うん。男の子だから仕方ないよね。朝勃ちっていうんだっけ？」

「そうだね……」

「……辛そうだね。抜いてあげる」

「……………え？」

「いいから座って」

言われるがままに僕はベッドに腰を下ろした。

桔梗は僕の前に跪いて、桔梗が躊躇なく強直を口に含んだ。

「ん……………あむっ、んん……………じゅる……………」

「うっ、くうっ……………」

生温かい口内の感触が、肉棒全体にじんわりと広がっていく。

ヌルヌルとした内頬の粘膜で肉幹を包み込まれると、ビクツと肉胴が跳ねてしまう。

「んくっ、んっ……じゆるるっ……ずっ、ずずずっ、はああ……」

そそり立つ男根の逞しさに、桔梗がうっとりした顔になるのがわかった。

愛おしそうに肉棒を見つめながら、亀頭をグツと頬肉に押し付けてきた。

「んちゅっ、ずっ、ぢゆるるっ……」

「桔梗、気持ちいいよ……」

「んぐっ！ ずっ、ずずずっ！ じゆるるっ、ずるっ！ じゆるるるうううッ！」

下腹部へと顔を押しつけてくると、桔梗の熱い吐息が根元をくすぐってくる。

桔梗が自らこうやって奉仕してくれる姿に興奮を覚えると、思わずその綺麗な髪を撫でてしまう。

「ひゃうっ!? んっ、はあ、はふうう……んむっ、ちゅっ、れろっ、ぢゆるるるううっ……」

髪に触れられた瞬間、ビクンツと身体を震わせた桔梗。

「嫌だった？」

「嫌じゃなひ……。しゅこし驚いたらけ……。んずっ、ずっ、ぢゆるるるっ」

ふるふると頭を振ると、また懸命に桔梗が奥まで肉棒を咥えこもうと剛直を頬張っていく。

「やばい、ずっとこうしていたいくらい気持ちいい」

「学校遅刻ちひやうよ……。んぶつ、ちゅ……。ちゅずずつ」

「遅刻してもいいじゃん」

「らめらよお……。んぶつ、ずつ、ずずずつ……。ど、どう？　しよろしよろイキひよう？」

唇の端から唾液を垂らしながら、桔梗が視線を俺の方へと向けてくる。

濡れ光る潤んだ瞳で上目遣いに見られると、桔梗の可愛らしい顔が、媚びた娼婦のように見えるてしまう。

「まだ、かな？」

「わかっひやつ……。んずつ！　ずつ！　ズズズズツ！　ジュールツ！」

「うあつ!?　それ気持ちいい！　そうやって頬肉に擦られるのいいよー」

ヌルヌルとした内頬の肉の粘膜で、擦り上げられる快感に喜悦の声が漏れてしまう。

「んずつ！　ずつ、ぐぐぐつ、ぶぶうつ、これ気持ちいい？　じゆるつ、ずつ！　んぶつんぶつ！」

肉棒を横ぐわえにするように、桔梗が顔を動かしていく。

頬肉にグイグイと亀頭が押しつけられると、桔梗の頬が肉傘の形に膨らんでいく。

「うわ、それすごくエロいよ」

「んぶウウツ、うつ……。ひゅううつ……。んぐつ、ぐつ、は、恥ずかひい……。ぐぶつ、ん

「ぶぶぶー！」

恥ずかしさを感じながらも、桔梗はぐつと顔を押しつけてくる。

その懸命に奉仕する姿が、また僕の快感を煽りたててくる。

「じゅっ、ずずっ、グプッ！ んぶっ、じゅぶっ、ずぶうっ！ じゅぶぶぶぶぶうっ！」  
腰を跳ねさせて悦びを伝える度に、桔梗が嬉しそうに身をくねらせる。

僕に快感を与える奉仕をしていることに、至福を感じているように見える。

「僕も動くよ」

「んぐっ？ 好きにしへいいよっ。ぐぶっ、んぶぶうー！」

桔梗が頷いたのを確認してから、僕も腰を振りたてていく。

「ぐぶっ!? んごっ!? しゅごっ……ちんぽがこしゅれへえ……口の中あ、おかひくなるよお♡」

「桔梗も気持ちいい？」

「んずずずっ、ぐぶっ……気持ちひいっ♡」

僕を悦ばせるために、顔を赤らめながら桔梗がコクリと頷く。

「くっ、桔梗エロ過ぎだよ！ もう出ちやいそう！」

「んぶっ、じゅぶっ……だ、出ひてえ……いいからあっ♡ んぐっ、ぐっ、このまま出ひてえっ♡」

啜えこんだまま唇を引き結び、桔梗が僕の突き上げを必死に受け止める。

「はっ、はあっ、ザーメン飲んでくれる?」

「飲みゆ、飲むからあ……早く出ひてえっ♡」

肉棒を頬張ったまま、桔梗が熱く潤んだ声でおねだりしてくる。

「ああ、もう出るからね!」

「むっ、むうっ、ズズズズっ! 飲ませへえええええっ♡」

僕の興奮を煽りたてる桔梗の卑猥なおねだりに、龟头が膨らみ精液が暴発しそうになる。

「出すよっ!」

「じゅずずずっ! じゅるるるるっ! じゅごっ、じゅごっ! じゅぼぼお!」

頬肉の粘膜をピタリと龟头に張り付け、ズルズルと擦りたてられる。

「うあっ……!」

口内で跳ね飛んだ肉棒が、溜まっていた精液を一気にぶちまける。

「つくひゅウンっ!? ひインッ! ジュゾッ! ごりゅうっごりゅうっ、じゅるるウッ!」

怒涛の勢いで噴き出す精液は、瞬く間に口内を満杯にする。

一気に満ちた精液によって頬が膨らみ、桔梗が軽く眼を見張る。

「ごぼしちやだめだからね」

「むうっ、ふっ、んむううっ……!? ふっ、ぐぶうう……」

一滴も零すまいとするように、きゅつと唇を引き結んだ桔梗が、ちらりと視線を僕の方へ向けてくる。

「じえんぶ飲みみゆからあ……んぐっ、ぐぼぼお！」

ザーメンを飲む姿を見ていて欲しいと、桔梗の瞳が訴えかけているように見える。

「んぐっ！ んぐっ！ ゴクツ！ ゴキユツ、ゴキユツ！」

激しく喉を鳴らすと、溜め込んだ精液を桔梗が一気に飲み下していく。

喉が上下に動き、どろどろの精液を食道にへばりつかせながら、お腹の中へと白濁汁を溜め込んでいった。

「桔梗、美味しかった？」

結局、桔梗は大量の精液をすべて飲み込んだ。

何度かむせ返しそうになるも、涙を零しながら必死に飲み込む姿に僕は愛おしさを感じた。

「うん、美味しかったよ」

「嘘だ。苦かったでしょ？」

「確かに苦かったけど……美味しいのは嘘じゃないよ。だって要が私に出してくれたも



のだから」

「そっか」

「うん。あ、そろそろシャワー浴びないと遅刻しちゃうよ」

「そうだった！　すぐに浴びてくる！」

転生して二日目。この日から桔梗にフェラをしてもらうのが朝の日課になった。

☆☆☆

前日に僕との関係をクラスメイトに言いふらさなかつた桔梗だが、あっさり公表することになった。

理由は一緒に登校する姿を大勢のクラスメイトに目撃され、教室に着くなり質問攻めにあつたからだ。

桔梗は女子に、僕は男子に、二人が恋人同士であることを説明した。

当然桔梗を狙っていた男子たちからは嫉妬、妬みなどのネガティブな感情をぶつけられてしまった。

僕は生まれて初めて「リア充爆発しろ」と言われた。

「そっか。僕はリア充だったのか」

その一言が男子たちの醜い感情に火をつけてしまった。

池や山内を中心に罵倒され続けたが、途中から桔梗を取り囲んでいた女子たちが応戦するようになった。

1年Dクラスを象徴する男女間の言い争いは、茶柱先生が教室に来るまで続いた。

「要は部活動の説明会に参加する？」

「しないかな。部活に入るつもりはないし」

昼休み。クラスメイトに気を遣われた僕たちは二人で昼食をとっていた。

「桔梗は部活に入るの？」

「要が入らないなら私も入らないよ。部活に入って要との時間が減るの嫌だし」

「そう言うと思ったよ」

「それでね、要に提案というかお願いがあるんだけど」

「なに？」

「あまり無駄遣いはしないほうがいいって言ってたでしょ」

「うん」

昨日。僕はファミレスで桔梗たちにポイントを無駄遣いしないようアドバイスをした。

桔梗を含めたみんなが毎月10万ポイントが支給されると勘違いしており、僕は茶柱

先生が毎月10万ポイントとは言っていないこと、支給されるポイントは変動される可能性があることを伝えた。

また監視カメラが設置されていることを説明し、理由についてはみんなに考えさせた。

考え抜いた結果、授業態度などでポイントが変動される可能性があるという答えに辿り着いた。

あくまで可能性の話だがほかのクラスメイトにも情報を共有することになり、平田と桔梗がクラスメイトに説明することになった。

本来なら一時間目が始まる前に説明するはずだったが、僕と桔梗が原因でそれどころではなくなったため、改めて放課後に実施することになっている。

「だから明日からお弁当作ろうかと思って」

「お弁当ね。いいんじゃない?」

「でしょ。要の分も作ろうと思うんだけど……いいかな?」

桔梗が身体の前で指をもじもじと動かしながら上目遣いで見つめてくる。

「ごっよ」

桔梗に上目遣いでお願いをされたら断れない。

原作当初の綾小路も桔梗の可愛らしい仕草に照れていたな。

「やったつ。ありがとうっ」

「お礼を言うのは僕だけどね」

これですますます男子たちから嫉妬されそうだ。

でも仕方ない。僕は毎日可愛い彼女の手作り弁当を頂くリア充なのだから。

「それと夕食も作りたいたんだけどいいかな？」

「もちろん」

「それじゃ帰りにスーパー寄ろうね」

「うん」

「要、食べたいものある？」

「桔梗かな」

「ばかっ♡」

のちに知ることだけれど、僕たちの会話を聴いていたほかのクラスの男子が血の涙を流していたらしい。

「でもいいの？」

「なにが？」

「僕ばかり構って、友達付き合い疎かにしたらやばいんじゃない？」

桔梗は原作ではクラスのアイドルになっている。

たくさんのクラスメイトから相談され、彼氏がいないのでたくさんの男子たちから好意を寄せられている。

「それはうまくバランスとるから大丈夫だよ」

「ならいいけど」

「心配してくれてありがとうっ」

「ううん」

「……大丈夫。中学と同じ失敗はしないから」

昨晚。寝る前に僕は桔梗から中学時代の話を聞いた。

内容は原作と全く同じものだった。

『承認欲求』

それを満たすために、桔梗は努力をし続けて、最後に失敗した。

原作と違うのは『承認欲求』に強く依存するようになった経緯だ。

桔梗が『承認欲求』にすぎた原因は——僕だ。

もともと僕に強く依存していた桔梗は、僕と離れ離れになったことにより、心が壊れかけたらしい。

僕と離れてから中学に入学するまでの一年間は生きる屍だったと桔梗は言った。

僕の写真を見ながら自分を慰めたり、自傷行為をしたり、様々な自身に刺激を与える

行為をしても桔梗の心は安定しなかった。

中学に入学し、『承認欲求』を満たすことで心が安定するようになったようだ。

ストレスは溜め込んでいたけれど、頭をかきむしるほどではなかったようで、そこは原作よりマシになっている。

「それに要があるから大丈夫。昔みたいにみんなにちやほやされなくても大丈夫だから」

「桔梗の気持ちはわかった。……そろそろ行くこうか」

「うん」

桔梗の過去話を聞いたけど、桔梗は堀北については一切触れていなかった。

原作と同じように退学させようとするのか。

それとも僕という精神安定剤を得たので堀北を見過ごすのか。

もう少し様子を見たほうがよさそうだ。

放課後になり、桔梗と平田が教壇に立って、クラスメイトにポイント変動説を説明した。

最初は聞く耳を持たなかった生徒もいたが、監視カメラの存在を知らされて信憑性が増したようで、真剣に話を聞くようになった。

ちなみに茶柱先生は教室の後ろで、呆けた顔をしながら桔梗と平田の話を聞いてい

た。

懸念していた桔梗の影響力だったが、上目遣いでお願いをしたおかげで、高円寺以外の男子たちは真面目に授業を受ける約束を取り付けることに成功した。彼氏がいても美少女の上目遣いの破壊力は変わらないらしい。

☆☆☆

転生してから一週間が過ぎた。

僕と桔梗は性に乱れた生活を送っている。

朝は桔梗に奉仕してもらい、夜は互いに限界が来るまで身体を重ねている。

桔梗の膣内部は僕専用の形に変わりつつあった。

「いい加減コンドームを買おうと思うんだけど」

朝食を食べながら桔梗に聞いてみた。

「アフターピル飲んでるから大丈夫だよ」

「でも……」

「要だつて生の方がいいでしょ？」

「確かに……」

「私も要に気持ちよくなってもらいたい」

「……わかった」

何度も桔梗を抱いているのに、僕は一度も避妊具を装着していない。

桔梗はアフターピルを飲んで避妊してくれている。

現実世界だと入手は難しいけど、この世界では薬局で販売されており、入手しやすくなっている。

「そういえば今日は水泳の授業があるよね」

「だね。池たちが騒いでたよ」

「あー、あの人たち本当にきもいよね」

「それは同意する」

桔梗は時折黒い部分を見せてくる。

これは桔梗が僕を信頼している証だ。

「なんで男子ってあんなに馬鹿なの？」

「男子にもいろんな人種がいるから。綾小路くんみたいなクールな男子もいるし」

「あー、あの根暗な人だよ」

「クールって言いなよ」

原作主人公を「アイスつっちゃ駄目でしょ」。



原作だと君を退学に追い込もうとするチート野郎なんだから。

「私、何を考えてるかわからないから苦手かも」

「桔梗でも苦手な人いるんだ」

「たくさんいるよっ」

桔梗が僕以外の男子とあまり関わらないので、綾小路の交友関係は堀北と三馬鹿のみになっている。

僕もあいさつ程度しか話したことがない。

いずれ親交を深めたいものだ。

### 3話 桔梗のスクール水着

登校すると池と山内が水泳の授業の話題で盛り上がっていた。

大声で誰のおっぱいが大きいのか談義をしており、女子たちが嫌悪感を抱いているんだけど、本人たちは全く気付いていない。

「あいつらキモすぎ」

隣に立つ桔梗が呟いた。

「要はああはならないよね?」

「当然でしょ」

「愚問だったね」

桔梗は池たちに性的な目で見られていることに気付いている。

なので彼らへの嫌悪感はほかの女子より強い。

「あ、おはよう櫛田ちゃん!」

僕を無視して桔梗にだけ挨拶をする池と山内。

僕は彼らに平田と同じような扱いを受けている。

つまり嫉妬されているのだ。

だが仕方ない。

こんな可愛い彼女がいるのだから。

嫉妬されるのは当然だ。

「おはよう、綾小路くん」

僕の一列前に座る綾小路に挨拶をした。

「おはよう」

「みんな浮かれているね」

「そうだな」

直後に池に呼ばれた綾小路は彼らのもとに向かった。

女子の胸の大きさを賭けをするらしい。

「……愚かだな」

「そうね」

僕の呟きに堀北が反応した。

「まともな男子が一人はいるようでよかったわ」

「ど、どうも……」

初めて堀北に話しかけられたので動揺してしまふ。

「……ねえ、あなたに聞きたいことがあるのだけれど」

「なにかな？」

「あなたが支給されるポイントが変動したり、監視カメラに気付いたのよね？」

「そうだよ。ただポイントの変動はあくまで可能性があるって言っただけだよ」

「そうね。でも可能性は高いと思うわ」

堀北と話してて桔梗が怒ったりしないだろうか不安だ。

だが原作のヒロインである堀北と話せて、小さな感動を覚える僕は彼女を無視することはできなかつた。

「いつ気づいたのかしら？」

「監視カメラなら初日に気付いたよ。ポイントの変動に関しても初日に思いついたかな」

「……そう。ちなみに私も監視カメラの存在には気づいてたわ」

「あ、うん……」

なぜ僕に対抗してきたんだこの子は。

堀北って負けず嫌いなんだと認識した僕だった。

☆☆☆

昼休みが終わり、待ちに待った水泳の授業がやってきた。

クールを貫いている僕だが女子の水着に興味がないわけじゃない。むしろ桔梗と堀北の水着には興味深々だ。

「桜庭、なんだよそれ……」

同じく女子たちの水着姿が目的であろう池たちは、あろうことか僕の上半身に注目していた。

原因は左胸にある傷跡だ。

桔梗曰く昔と比べると薄くなったようだが、やはり目立ってしまう。

「土佐犬に引っかけられたんだよ。先に行くね」

男子たちに見られても気持ち悪いだけだ。

僕は素早く着替えて、プールに向かった。

「うわ、大きいな……」

高度育成高等学校のプールは屋内にあり天気の影響を受けない。長さは50Mもあり、水も澄んでいて綺麗で、環境は抜群だ。

プールサイドには僕以外に生徒はいなかったが、2階に見学であろう女子たちの姿があった。

「要、早いねっ」

見学組の女子たちを見上げるとすぐに桔梗がやって来た。

「そういう桔梗も早いと思うけど」

「要に早く水着姿見てほしくて。……どうかな?」

「最高だよ」

スクール水着を着た桔梗は、妖艶な身体のラインが浮き彫りになっている。

程よくついた太ももやお尻の肉と云うか膨らみが、妙に生々しい。

「ありがとう。要に褒めてもらえて嬉しい」

これから授業だというのにムラムラしてきてしまった。

「……よかつたら今日はこれでエッチする?」

桔梗が僕の耳もとへ口を寄せて囁いた。

そうか。

僕がスクール水着姿の桔梗を抱いていた夢は予知夢だったのか。

「お願いします」

「お願いされましたっ」

これで僕と桔梗が、明日、寝不足になることが現実となった。

数分後。次々とクラスメイトがプールサイドにやって来た。

男子たちは女子の水着姿に興奮し、僕と桔梗が付き合ったきっかけを知っている女子

たちは僕の傷跡に興奮していた。

授業の内容は原作と同じで、自由形の競争だった。

桔梗は総合4位、僕は決勝に進んだものの4位に終わった。

☆☆☆

放課後。僕は寮に帰るとすぐに桔梗をスクール水着に着替えさせ浴室に誘った。

夕食作りもあるので、最初は渋っていた桔梗だったが、抱きしめてキスしたら言うことを聞いてくれるようになった。

「はふっ!? あああ、水着姿でチンポっ、入れられてる……っ!」

桔梗も期待していたようで、指であそこを数分弄っただけで、愛液を溢れさせた。

僕は我慢できなくなり、フェラもさせずに、対面立位で欲望の塊を桔梗の秘所に挿入した。

「桔梗も我慢してたんだよね?」

押し入っていく肉棒を迎え入れる膣肉は、熱く貪るように絡みついてくる。

媚肉によって肉傘をこねくりまわされていく快感に負けじと、とろとろの秘肉の壁を押し分けながら、奥へ奥へと肉棒を突き立てていく。

「くひっ!? ああ、はあっ、はひいいっ♡」

肉壁を擦られる快感に、発情した桔梗の身体は敏感に感じてしまうようだ。

ギユツと僕に腕を回ししがみついてくると、柔乳がむにゅつと胸板の上で押し潰される。

先端にある突起物は水着越しでもわかるほどにピンピンに勃起していた。

「奥まで全部入れるからね!」

「くひインツ!? あああっ♡ おちんぼ全部っ……入ったあ……♡」

桔梗の腰をしつかりと固定すると、肉棒の根元までズブリツと埋め込む。

膣穴に溜まっていた蜜汁がぶちゅつと音を立てて噴き出し、僕の下腹部を濡らしていく。

「やっぱり桔梗のまんこは最高だよ」

「ば、ばか……♡ はうっ!? はふううんっ♡」

根元まで突き込んだ肉棒で、子宮口に亀頭を接吻させる。

「ふひイイツ!? 子宮っ、おちんぼ当たってるっ……♡ ひやあっ♡ ああああっ♡」

子宮を小突かれる快感に、ますます強く僕にしがみついてくる桔梗。

「もうイツちやいそうになってるんだ。それじゃ奥を突くのは休憩しようか」

「くうっ、ひインツ、はあっ、ひやひいいいっ♡」



子宮口に押し当てていた肉傘を引き離し、ズツ、ズツと肉棒を抜き出していく。  
「んひっ!? まんこがあ……め、めくれちゃう……はうっ♡」

エラ首で肉壁を擦られる刺激に、桔梗がビクツ、ビクツと腰を跳ねさせる。

肉棒が抜き出されていく切なさ、桔梗は無意識のうちに自ら足を腰へと絡ませてくる。

媚肉をうねらせ、膣奥へと肉棒を戻して欲しそうに、桔梗が甘い吐息をつく。

「ん……………」

再び桔梗に悦びを与えるべく、勢いをつけて肉棒を突き戻す。

「ふひインツ!? あっ、ああっ♡ きたああああっ♡」

喜悦の声を放つ桔梗が、膣穴を収縮させ髪を振り乱し顔を仰げ反らせる。

しがみつく腕に力を込め、プルプルと全身を震わせたまま、快感を貪っていく。

「いくよー!」

耳元に息を吹きかけ囁きながら、チンポノックを開始することを告げる。

「ひいひいんっ♡ はううううっ♡ だ、ダメえ♡ ひいつ、あひいインツ♡」

息つく間も与えず、短い間隔で子宮口を突きまくる。

「あっ、あっ、あっ♡ ああっ♡ あはああああんっ♡」

突かれるままにリズムよく悦びの声を上げ、膣肉で肉胴を締め付けてくる。

発熱して熱くなった媚肉が蜜汁を滲ませ、肉幹へとまぶすように蠢かせながら、僕に悦びを与えてくる。

「まだ夕食作つてないのに……セックスの事しか考えられなくなるっ♡ 要のチンポで頭いっぱいになるっ♡」

男子たちが釘付けになった桔梗の水着姿を貪っている。

その興奮に、僕は息遣いを荒げ、セックスに夢中になっていく。

「ひうつ?!? くうつ、はうつ♡ ああつ、あんつ、あふウンンツ♡」

小刻みで軽い突き入れから、今度は大きく腰を振りながら、ガツンツと重い刺激を子宮口に与えていく。

肉エラで、媚肉を抉りながら、汁にまみれた肉胴を抜き出すと、またすぐに子宮口をこじ開ける勢いで肉竿を突き戻す。

「あひいいつ♡ はつ、んうつ、はああつ♡」

子宮を持ち上げれる圧迫感に、桔梗はどんどんと歓喜の声を大きくしていく。

膣穴に溜まった蜜汁をかき出すように、肉棒を抜き出してはまた突き戻す。

単調な動きを繰り返すけど、一突き一突きの思い圧迫感に、桔梗は何度も意識を飛ばしそうになる。

「んひつ♡ ふひいいつ♡ はあつ、あんつ♡ んあつ、あふううつ♡ あひいいつ

♡

僕にしがみついたまま、自ら下腹部を押しつけてくる桔梗。

また膣奥まで突いてほしいと、おねだりしてきている。

「戻すよ」

肉棒を突き戻すことを囁きかけると、桔梗が嬉しそうに顔を綻ばせる。

「はあつ、はあつ、まんこの奥が、ムズムズしっぱいだからっ……チンポっ、奥まで戻して……っ♡」

「わかってるよ!」

「くひいっ♡ はうっ、そ、そう、それえ……イイツ♡ 気持ちいいよおおっ♡」

奥を突かれイキそうになりながら、桔梗が僕にしがみついたまま、また顔を仰け反らせた。

「はあつ、そろそろ僕もイキそうかも!」

腰を振り動かしのまま、絶頂しそうになっていることを桔梗に告げる。

「はあつ、はっ、ひいんっ、な、中にい……あああああつ♡」

「もちろんだよ!」

「もつと奥う、チンポでキスして……ひっ、ひっ、んひいんっ♡」

「桔梗、エロすぎるよ!」

射精感が高まり、亀頭がプクツと膨らみ始める。

とろとろになった柔らかい膣肉へのキツイ締め付けに耐えながら、ズンツとまた奥へと突き戻す。

「ひうううっ♡ いいいいっ♡ いいよおおおっ♡」

髪を振り乱しながら頭を振る桔梗を見ながら、僕もラストスパートをかけていく。

「くっ、そろそろ限界かも!」

「ああ、イク、私もイキそうっ♡ イッちやうっ♡」

深く肉棒を突き立てられることを望むように、桔梗が全身に力を込め、僕にしがみつ

く。  
「ああああああっ♡ イクツ、イクうううううううっ♡」

絶頂することを宣言した桔梗が、肉穴を強烈に収縮させる。

肉傘を押し潰し、肉胴を引き千切るような強い圧迫感。

「僕もイクよっ!」

抱き着く桔梗を、僕もまた強く抱き返すと、止めを刺すように、子宮内へと肉棒を突き立てた。

「ひいああああああああっ♡」

子宮口をこじ開け、子宮内へと侵入した亀頭から、怒涛の勢いで精液が迸る。

「んうううううっ♡ たくさん出されてるうっ♡」

子宮壁にぶち当たる精液弾の激しさに、ビクビクツとなりながら桔梗が強く唇を噛み締める。

「くっ、止まらない……………」

水着に精液をぶっつけたくなる衝動に駆られ、射精の続く肉棒を動かし、膣肉を擦りながら抜き出そうとする。

「だ、だめえ……………！ 抜いちゃだめえええええっ！」

桔梗が全身に力を込め、肉棒を引き抜かせまいとする。

「桔梗……………」

抜き出させるどころか、もっと飲ませろとばかりに、膣肉をうねらせ肉胴をしごき上げてくる。

「もっと欲しいんだ。わかったよ！」

喜悦を貪る発情した身体は、牝の悦びをもっと味わいたいと欲しているようだった。

「ふうっ、んんああああっ♡ ああ、ああああっ♡」

快楽に溺れていくことに身体を打ち震わせながらも、桔梗は足を絡め腕を回し、僕にしがみつく。

「また出るよ！」

「へああああっ♡ はへっ、えうっ、ええああっ♡ ああああっ♡」

体育の授業からムラムラしていたせいも、精液が怒涛の勢いで噴出し続ける。

僕はすべての精液を注ぎ込むように、膣肉の圧迫を跳ね返しながら、精液を迸らせた。

「うふえ……要、凄すぎだよ……」

すべての精液を出し終えた僕はオーガズムをきめすぎて息が切れ切れの桔梗を抱えていた。

「桔梗がいけないんだよ」

「わ、わたし……?」

「そうだよ。桔梗の水着姿がエロすぎるから」

これだけ大量の精液を出したのに僕の肉棒は再度快楽を求めていた。

「だから責任取ってね」

「……え? まさか……?」

「もつと桔梗の膣内に出したい」

「むっ、むりむりっ! これ以上されたら壊れちゃうよっ!」

真顔で拒絶する桔梗。

こんな焦った桔梗を見るのは初めてだ。

「駄目だよ。桔梗は言ってくれたじゃないか」

「え…………？」

「桔梗の身体を好きにしていって」

「っ…………」

「だから好きにさせてもらおうよ」

「ひっ…………!?!」

僕は恐怖に怯える桔梗を犯しまくった。

予知夢と同じようにいろんな体位で桔梗の膣に肉棒を突き刺した。泣いて懇願しても僕は容赦なく桔梗の身体を貪った。

☆☆☆

「ごめんなさい」

あれから二時間後。僕は桔梗に土下座し謝罪をしている。

「顔上げてよ！ 謝らなくていいから！」

僕は桔梗を気絶するまで犯し続けた。

痙攣しながら失神した桔梗を見て、僕は我に返った。

急いで桔梗の身体を洗い、ベッドに移動させた。

桔梗が目覚めたのは今から10分前だ。

「…………怒ってない？」

「怒ってないよ。そりややり過ぎだとは思ったけど」

「…………ごめん」

「ううん、それだけ私の身体に夢中になってくれたんだよね？」

「うん」

「なら許してあげる」

「…………ありがとうっ」

桔梗の器の大きさに感謝した僕は、彼女を思いつきり抱きしめた。

「要、苦しいよ…………」

「あ、ごめんっ」

すぐに桔梗から離れる。

「あ、離れちゃだめだよ」

「え…………？」

「苦しくならない程度で抱きしめて」

「わかった」

僕はお詫びの気持ちも込めて彼女を優しく抱きしめた。



僕たちは夕食を食べていないことを思い出すまで抱きしめあった。

## 4話 BE WITH YOU

彼とは物心つく前からの付き合いだ。

家族ぐるみで仲が良く、お互いの家で何度もお泊りしたことがある。

いわゆる幼馴染という関係だった。

小さい頃は彼のことを異性として意識したことはなかった。まあ、私が恋愛に興味がなかったのもあるんだけど。

背は私より小さかったし、中性的な顔だからみんなに女子と間違われることもあったし、鼻水もよく垂らしていた。はつきり言って男子としての魅力はなかった。

私と彼の関係に変化が訪れたのは小学四年生の時だった。

彼と一緒に下校中に近所の家から脱走した土佐犬が私に襲い掛かってきた。

私はあまりの恐怖で動けなくなってしまった。

近くにいた大人たちも突然の出来事で動けずにいた。

そんな私を身を挺して庇ってくれたのが彼だった。

土佐犬は凶器ともいえる鋭利な爪で彼を容赦なく引つ掻いた。

彼が負傷してすぐに飼い主がやってきた。

土佐犬は飼い主の言うことは聞くようで、すぐに大人しくなった。

この事件がきっかけで、私は彼とのことを異性として意識するようになり、すぐに好きになってしまった。

我ながらチョロい女だと思う。

でも仕方ない。

だって私より小さい身体で、私を守るために、命がけて土佐犬に立ち向かってくれたんだもん。

惚れないほうがおかしい。

彼は前から私のことが好きだったようで、私の告白を受け入れてくれた。

こうして私たちは、幼馴染から恋人へと関係が変わった。

恋人になった私と彼は小学生らしからぬ行為に及んでいた。

毎日、どちらかの部屋で、抱き合ったり、キスしたり、彼の傷跡を愛でたりした。

セックスにも興味はあったけれど、まだ小学生だったので、中学に上がるまではオナニーで我慢しようと思い、彼を押し倒すことはしなかった。

彼との愛を育む日々は幸せだった。

そんな幸せな生活は一年で終止符を打つことになった。

彼が父親の転勤で北海道に引っ越すことになったのだ。

私は彼が引つ越さぬよう、必死に抵抗した。

けれど小学生の私にそんな力はなく彼と別れることになった。

彼と別れてからの私は自分が崩壊していくのがわかった。

私は心理的な苦痛を和らげるため、自傷行為に走った。

リストカットをしたり、父親の煙草を腕に押し付けたりしたけれど、あまり効果はなかった。

自傷行為をやめた私は、彼を思いながら毎晩自分を慰めるだけの日々が続いた。

彼と別れてから一年後。

私は、両親の勧めで、地方にある私立の中学校に進学することになった。

生きる屍状態が一年続いた私を見かねた両親が環境を変えてみては、と提案してきたのだ。

中学に上がった私はようやく心理的な苦痛を和らげる方法を見つけた。

それは——『承認欲求』を満たすことだった。

私は誰よりも好かれることで彼がいらない寂しさを紛らわすことにしたのだ。

見るのも嫌な気持ち悪い男子に手を差し伸べたり、腸が煮えくり返るほどのブスにも手を差し伸べたりした。

そして私は人気者になった。

毎日友人たちとの付き合いで忙しかったけれど、それが彼がない寂しさをより紛らわしてくれた。

ストレスも溜まることもあったけれど、彼を思つてオナニーをしたり、ブログに愚痴を書き込んだりして、解消していた。

中学二年の夏休み。

実家に帰った私は、再び彼と一緒にいれるよう計画を立てた。

計画といつても、私と彼が同じ高校に進学するため、外堀を埋めただけなんだけど。

私は母親を通じて、彼の母親に連絡を取り、お願いをした。

彼を私と一緒に高校に進学させてほしい、と。

もともと私を娘のように可愛がってくれた彼の母親はすぐに承認してくれた。

また、彼を驚かせたいので、このことは彼には言わないようお願いもした。

彼の母親は仕事が早かった。

お願いをした翌日に、私と彼の偏差値に合わせた寮付きの高校をリストアップしてくれた。

二人で検討した結果、第一希望は高度育成高等学校、第二希望は東京の私立高校となった。

進学希望先が決まった私はより一層勉強に力を入れた。

幸い、彼も勉強ができる方だったので、国立である高度育成高等学校は落ちても、私立高校は受かるレベルの学力を持ち合わせていた。

彼と一緒に過ごす日々を夢見ながら邁進していた私だったが、中学三年時に事件を起こしてしまった。

私が愚痴を吐いていたブログがクラスメイトに見つかってしまったのだ。

翌日にはクラス全員に拡散していて、みんなが私を責め立てた。

私に告白した男子が突き飛ばしてきたり、彼氏に振られて慰めた女子が机を蹴飛ばしてきたり、数々の暴力が私を襲ってきた。

私は傷つくわけにはいかなかったので、真実を振りかざし——クラスを崩壊させた。

ブログにも書いていない真実を話しただけで、クラスメイト達は、元凶である私を忘れて、争ってくれた。

その光景は滑稽に見えた。

あまりにも滑稽に見えて、笑いを堪えるのに苦労した。

そして私は再認識した。

友人たちは私の『承認欲求』を満たすための道具に過ぎなかった。

私にとって大切なのは彼だけだ。

彼がいれば、『承認欲求』を満たさなくても私は私でいられる。

彼のことを思い。

彼のことを愛し。

彼のために生きる。

そんな『櫛田桔梗』でいられるのだ。

問題を起こした私だけれど、停学処分を喰らうことはなかった。

むしろ保健室登校になったことで、受験勉強に集中できるようになった。

結果、私は高度育成高等学校に合格した。

彼の母親にもすぐに連絡し、彼も無事に合格したことを確認した。

私は歓喜に震えた。

やっと彼と一緒にになれる。

昔みたいに彼との愛を育む日々が始まる。

そんな期待に胸を躍らせ、私は中学を卒業した。

☆☆☆

入学式当日。私は彼と再会できるのが楽しみ過ぎて、朝の6時半には学校に到着して

いた。

当然、教室には誰もいなかった。

私はすぐに彼の座席を確認し、彼の座席で居眠りすることにした。

この机と椅子が、彼がこれから一年間使うものだと思うと、とても愛おしく思えた。一時間ほど経って、私はお手洗いに向かった。

私は個室で、彼と再会したときにパニックにならないよう、彼とのやり取りをシミュレーションした。

シミュレーションしているうちに、妄想が酷くなり、気づくと集合時間ぎりぎりになつていた。

私は駆け足で教室に戻った。

そして——彼を見つけた。

私は近くの席の子たちに挨拶をしながら、彼に熱い視線を送り続けた。

彼は担任の先生が来るまで居眠りをしており、私に気付くことはなかった。

担任の先生が教室から出ると、彼もそそくさと教室を出て行った。

私はすぐに彼の後を追って、声を掛けた。

四年ぶりに見る彼は、とてもカッコよくなつていた。

身長は私より15センチほど高く、中世的な顔は変わらなかったけれど、以前より男



らしさを感じる顔つきになっていた。

彼も私以上に魅力的な異性に成長していたのだ。

彼との再会に喜びが隠せない私だったが、彼に名字で呼ばれてしまい、少しだけ傷ついた。

でも仕方ないと思う。

だって四年ぶりに会うんだもん。

わかっているから。

要も四年ぶりに見る私に見惚れて、昔みたいに桔梗って呼べなかったんだよね。

照れ屋なのは相変わらずなんだから。

そんな要と再会した私は、空白の四年間を埋めるべく、なるべく彼と一緒に行動するようにした。

入学式が終わり、私は要と一緒にクラスメイトとファミレス、カラオケで親睦を深めた。

カラオケでは、松下さんと佐藤さんが要に付きまとっていて殺意が沸いた。

私の要に馴れ馴れしく接しないで欲しい。

もちろんそれを口に出すことはなかった。

私が女子に嫌われるのはいいけれど、それが原因で要の立場が危うくなるのは避けた

かった。

カラオケでみんなと別れた私は要の部屋に行った。

そして四年ぶりに、私と彼の愛の証である傷跡を愛でさせてもらった。

傷跡はだいぶ薄くなっていたけど、消えることはないだろう。

私は四年間も溜め続けた愛を傷跡に注いだ。

気分が高揚した私は上着をはだけさせ、要に密着し続けた。

すると要のあそこが反応した。

嬉しかった。

成長した私を女として感じてくれたのだ。

そして私は——彼に処女を捧げた。

私たちは理性が崩壊するまで交わり続けた。

彼の肉棒に貫かれたときは痛かったけれど、それ以上にうっとりするほどの幸福感に満たされていたので問題はなかった。

ようやく私を傷物にしてくれた。

私は彼以外に傷つけられなくなかった。

だから中学で事件を起こした時も、自分が傷つかないよう、自分で自分の身を守った。処女を失った痛みはすぐに快感に変換された。

要とのセックスは、オナニーの比じゃなかった。

あまりの気持ちよさに私は下品な声を上げ続けてしまった。

本当はもつと可愛らしく喘ぐつもりだったのに……。

けれど要もそんな私に興奮してくれたようで、私の中にたくさん子種汁を出してくれ  
た。

初めてのセックスを終え、繋がったまま要と抱き合ってる時に悟った。

私は要に抱かれるために女として生まれたのだ、と。

本当の女としての悦びを知った私は愛する彼の腕の中で気絶するように眠りについ  
た。

### ☆☆☆

要と結ばれた私の朝は早い。目覚まし時計と携帯アラームが5時に鳴る。

まずはシャワーを浴び、お互いの体液だらけの身体を綺麗にする。

そこから二人分のお弁当を作る。彼に美味しく食べてもらうために手抜きは一切し  
ない。

要はいつも美味しいと褒めてくれる。

特に大好物の卵焼きは絶賛してくれる。

当然だよね。

だって隠し味に——私の血を染み込ませているんだから。

卵を畳む直前に、包丁で指を切って、血を垂らして沁み込ませるのだ。おかげで左手の人差し指の絆創膏が貼りっぱなしになるけど仕方ない。

だって私を細胞レベルで愛してもらいたいから。

私に通つてた血が、彼の血肉となる。

なんて素敵なことだろう。

「今日は多めに沁み込ませようかな」

彼は今日も笑顔で美味しいと言ってくれるだろう。

彼の笑顔を見るためなら、いくらでも血を捧げられる。

いつか彼が隠し味を訊いてきたら答えようと思う。

普通の男子なら引くだろうけど、彼なら受け入れてくれる。

だって要は私のことを愛してくれてるから。

私は自分が面倒で、重たくて、メンヘラであることを自覚している。

私の本性を知ったらみんなは気味悪がるだろうね。

でも彼はみんなとは違う。

要はこんな私を愛してくれる。

私には要しかない。

要にも私しかない。

私たちは二人じゃないと生きていけない。

「朝食は何を作ろうかな」

お弁当を作り終えた私は朝食作りに取り掛かった。

もう彼の部屋のキッチンは私専用のものになった。

入学して二日目から私は彼の部屋に入り浸っている。

歯ブラシ、マグカップ、食器など二人分揃っており、同棲感満載だ。

「あ、洗濯物を干さないって」

私は高校生になったばかりなのに、まるで主婦のような生活をしている。

なんて幸せなんだろう。

こんな生活がずっと続けばいいのに。

ううん、絶対続けさせる。

私は要と一生を添い遂げるのだ。

結婚も早くしたいけれど、それは要の進路次第だ。

大学に進学するなら大学卒業後に、就職するなら高校卒業後に、入籍するつもりだ。

要の両親も私が嫁ぐことを歓迎してくれており、未成年で結婚した場合は経済支援してくれることを約束してくれた。

私と要の結婚に障害はない。

あとは彼が私にプロポーズをしてくれるだけ。

早く、『桜庭桔梗』になりたい。

子供は二人欲しい。女の子一人、男の子一人が望ましい。

美男美女の夫婦だから、どちらに似ても可愛い子供が生まれてくると思う。

名前もそのうち考えよう。

「うーん」

そんな将来設計をしていると、要が目を覚ました。

「おはようっ」

「おはよう。ふぁ……」

要は眠たそうに目をこすりながら大きなあくびをした。

昨日も深夜までセックスに明け暮れたから、寝不足なのは仕方ないね。

「要、今日も抜いてあげるね」

彼が起きてすぐに私は奉仕をする。

朝勃ちしてる時も、していない時も、毎日奉仕をする。

朝食前に彼の新鮮なザーメンを頂くのが私の日課だ。

「シャワー浴びてくるね」

「げほっ、ごほっ、い、いつてらっしやい……」

彼は私がザーメンを飲み干すのを確認してから浴室に向かう。

最初は飲み込むだけだったけど、今では時間をかけて咀嚼して精液を噛み締めたり、一度精液を手のひらに出して指で弄ってから口に戻したり、大きく口を開けさせられたり、いろいろな方法で精液咀嚼をしている。

「うがいしないと」

彼の精液は好きだけれど、そのまま朝食を食べるのは厳しい。

要がシャワーを浴びてる間に朝食を作り終える。

この後は二人で朝食を食べて、朝の情報番組を見て、登校するだけだ。

要とは毎日一緒に登校している。

おかげで私と要は一年の中で名前が知れ渡るようになった。

ちなみに私たち以外に一年でカップルはいないらしい。入学して一週間ちよつとしか経ってないので当たり前だけだ。

「それじゃ行くかうか」

「うんっ」

登校する時間になり、私たちは手を繋ぎながら愛の巣を出る。

「今日も温かいねっ」

「だね」

私は彼と離れてから過ちを繰り返した。

自身の心と身体を傷つけ、家族に迷惑をかけ、人間関係も失敗した。けど後悔はしていない。

彼と一緒にいるために、私は間違いだらけの道を歩いてきたのだ。

だから今日も私は笑顔でいられる。

私の大好きな『榎田桔梗』でいられるのだ。

「要」

「なに?」

「今日も大好きだよっ」

彼と離れ離れになってから四年。

やっと彼の隣にいられるようになった。

私と要の物語は再開したばかり。

ここから二人きり、心を寄せ合って、人生を歩んでいくんだ。



## 5話 僕の恋愛講座

4月下旬。何気に楽しみにしていた小テストが行われる日がやって来た。

問題は主要5科目を数問ずつ配置した構成で原作と相違はない。

僕は転生前もそれなりの進学校に通っていたので、殆どの問題はすんなりと解けた。

だが最後の3問は桁違いの難しきで、自信をもって解答することは出来なかった。

「小テスト、最後の数問難しくなかった？」

昼休み。中庭で弁当をつまみながら桔梗が訊いてきた。

「そうだね。高一で解けるレベルじゃなかったと思う」

「だよな。やっぱり国立だけあって、テストは難しい問題が多いのかな？」

「否定は出来ないね」

「テスト勉強頑張らないとだねっ」

わざわざ弁当を置いて、可愛らしくファイティングポーズをする桔梗。

あざといとわかっていても、可愛いと思えてしまう。

僕はすっかり桔梗にお熱のようだ。

「うん。中間テストが終わったら二人で打ち上げでもしようか」

「する」

普段は無駄遣いをしない僕たちだけど、それくらい贅沢をしてもいいだろう。

「それと桔梗にお願いがあるんだけどいいかな？」

「もちろん。要のお願いならなんでも聞くよ」

「ありがとう。桔梗ってほかのクラスに友達っている？」

「今のところはいいいな。……どうして？」

桔梗はほぼ毎日僕と過ごしているので訊くまでもなかった。

「ほかのクラス——そうだね、Bクラスの人たちと友達になってほしいんだ」

「理由を訊いてもいい？」

「もちろんだよ」

僕はBクラスに友人を作ってほしい理由を説明した。

これはDクラス全員が中間テストを乗り込めるために必要なことだ。

「——わかった。三日くらいもらえる？」

「三日でいいの？」

「三日もあれば十分。女子でいいんだよね？」

「当然。僕以外の男子と仲良くされたら嫉妬しそうだからね」

「言われなくてもしないよ」

そう言われ、嬉しそうに桔梗は僕の右手を両手で握った。

「私は要だけだから」

「知ってる」

「要もほかの女子とあんまり仲良くしちや駄目だからね？」

「わかつてるよ」

転生当初はハーレムを目指していたが、桔梗一人いれば十分だ。

そもそも桔梗がべつたりしてくるので、他の女子が僕に手を出してくることはないだろう。

原作ヒロインとの関係も微妙なものだ。

佐倉とは挨拶を交わす程度。堀北にはなぜかライバル視されている。軽井沢とは連絡先を交換しているが一度もやり取りをしたことがない。他のヒロインとは会話すらしていない状況だ。

「そういえば軽井沢さんと平田くんなんだけど」

「その二人がどうしたの？」

「付き合い始めたらしいよ」

「そうなんだ」

「……興味なさそうだね」

「そんなことないよ」

「嘘。だつて全く驚いてないし」

それは二人が偽物の恋人になることを知っていたから。

二人がニセコイカップルにならない展開になれば面白かったけど、原作通りの展開になつてしまった。

「桔梗以外の女子に興味がないだけだよ」

「ば、ばかつ！」

顔を真っ赤にした桔梗は胸を叩いてきた。

ここが中庭じゃなければ、僕は桔梗を思いつきり抱きしめていただろう。

それほどまでに桔梗を可愛く思えてしまった。

☆☆☆

放課後。桔梗がBクラスの女子と友達になるため動き出した。

教室に取り残された僕は、あまり交流がない男子たちに声を掛けた。

「やあ。今からみんなでカラオケに行かない？」

僕が声を掛けたのは池、山内、博士の三人。須藤は部活のため不在だった。

「急になんだよ？」

「そうだ。なんで俺たちが桜庭とカラオケに行かないといけないんだよ」

「拙者、アニソンオンリーでござるが問題なからうか？」

敵意をむき出しにする池と山内。

クラスのアイドル的存在である桔梗と付き合ってる僕は彼らに嫌われている。

「桔梗が友達と遊びに行つて暇なんだ」

「そんなの知らねえよ」

「そうだ。それより桔梗つて馴れ馴れしいぞー！」

彼氏なんだから馴れ馴れしいのは当たり前じゃないだろうか。

やっぱり山内は頭がおかしいんだ。

「そつか。それじゃ博士と二人で行こうか？」

「いいでござるか？」

「もちろん。僕もアニメ大好きだから」

「そうでござかったか！ ならもつと早く行ってほしかったでござるー！」

「ごめんごめん。お詫びに女子にモテる方法を教えてあげるから」

「っ……!？」

僕その言葉に池と山内が反応した。

「お、おいつ。女の子にモテる方法ってなんだよ……?」

「そのままの意味だよ」

池の問いに笑顔で答える。

「二人にも伝授してあげようと思ったのに残念だ」

「仕方ないでござるよ。二人は『リア充撲滅隊』の一員でござるから」

「なにそれ」

いつの間にそんな組織が出来ていたんだろう。

池と山内は柱なのかな。

「ま、待つてくれっ! やっぱ俺も行く!」

「池が行くなら俺も!」

「……いいよ。それじゃみんなで行こう」

作戦通り。

これで池と山内を手懐けることができる。

その後、男四人でカラオケに行った僕は一時間ほど簡単な恋愛講座を開いた。

恋愛講座と言っても、大したものじゃない。

そもそも桔梗としか付き合ったことがない僕に恋愛の知識なんてあるわけがない。

池たちに教えたのは、今までの言動を省みることに、相手の立場になって物事を考える

こと、誰にでも優しく接すること、の三つだ。

すべて人として当たり前のことだが、池たちはそれができていない。

いまいち理解しきれていなかったたので僕は例を挙げた。

「プールの授業の前に女子のランキングを作ってたでしょ」

「おっぱいランキングだろ」

池が堂々と答える。

「それがどうしたんだ？」

「それを女子に置き換えてみよう。女子たちが男子のちんこが大きいランキングを作ってたらどう思う？」

極端な例えになってしまったが、お馬鹿な三人にはわかりやすかったようで、

「そ、それは……」

「引くわ……」

「いくらかわいい子でも無理でござる……」

想像したのか、全員が引いていた。

「つまりそういうことだよ」

「なるほどー！」

「そういうことか！」

「理解したでございるー！」

池、山内、博士の三人の声が弾む。

こんな例えで理解してくれるのだから、扱いやすく助かる。

「だからこれからは言動に気を付けようね」

「はいー！」

こうして僕は池たちを手懐けることに成功した。

翌日。満面の笑みで僕に挨拶をする池たちを見たクラスメイトが怪訝な表情をしたのは言うまでもないだろう。

☆☆☆

5月1日。入学後初めてのクラスポイント発表の日がやってきた。

「要、ポイント確認した？」

朝食中に桔梗が問う。

「朝食を済ませたら確認するよ。桔梗は確認したの？」

「したよ。7万1000ポイント支給された」

僕の予想より減っている。



注意喚起するまでの授業態度がいけなかったようだ。

「そっか。教えてくれてありがとう」

「ううん」

朝食を済ませた僕もスマホを操作しポイント残高を確認する。

「僕も支給されたのは7万1000ポイントだったよ」

「……私と同じ?」

「そうだね」

「つまり……?」

「ポイントは個人ではなくクラス単位で決まるということだね」

可愛らしく首を傾げたままの桔梗に答える。

「クラス単位……」

「教室に行ったらみんなにも聞いてみよう」

「うん」

ほかのクラスのポイントが原作と同じなら、晴れて僕たちはBクラスに昇格することになる、

僕は胸を躍らせながら学校に向かった。

教室に入ると、こちらから質問するまもなく、クラスメイト達から質問攻めにあつた。

当然ながら全員が7万1000ポイント支給されている。

「桜庭くんの予想は当たってたね」

平田がスマホをかざしながら近づいてきた。

「みたいだね」

「助かったよ。もし桜庭くんが気づいてくれなければ、ポイントが0になってたかもしれない」

「さすがにそれはないよ」

さすがにそれはありました。

原作では0ポイントになり、茶柱先生から叱咤されました。

「あなたの予想、当たってたみたいね」

自席に座ると、堀北が囁いた。

「そうだね。感謝してもいいよ」

「っ……」

一列前の席に座る堀北が振り向いて睨んできた。

挑発しすぎたようだ。

「ごめんね。ジョークだよ」

「面白くないジョークね」

「だからごめんって」

「ごめんですめば警察はいらないのだけれど」

「警察に通報されるほどのことはしてないと思うんだけど」

挑発したせいで、やけに突っかかってくる。

やっぱり堀北の相手は綾小路しか務まらない。

僕には無理だったんだ。

そう諦めかけてる途中で茶柱先生が入室した。

ホームルームの始まりを告げた茶柱先生はなんとも言えない表情をしていた。

おそらくクラスポイントを大幅に減少させた僕たちを叱咤するつもりだったのだろ

う。

だが結果はまさかの710クラスポイント。

こんな数字を出されては怒ることもできない。

「お、おめでどう……。今日からお前たちはBクラスだ……」

そう言った茶柱先生が黒板に張り付けた紙には各組のクラスポイントが記載されて

いた。

僕たちDクラスは710。Cクラスが490。Bクラスが650。Aクラスは94

0。

Dクラス以外は原作と同じクラスポイントだった。

なぜBクラスになったのか多くの生徒から質問をされる中、茶柱先生はSシステムについて説明をした。

その説明により、クラス全員がDからBクラスに変更になったことを理解した。

しかし、一部の生徒は自分がDクラスになったことに納得がいかないようだった。

堀北なんて怒りのオーラがあふれ出している。

茶柱先生が騒ぐ生徒を注意した後に小テストの結果が発表された。

僕は90点。桔梗は85点だった。ちなみに僕をライバル視している堀北も90点だった。

「なんで俺がDクラスなんだよ……!」

茶柱先生が居なくなつてからの休み時間。

クラス一の秀才である幸村が荒ぶつておられる。

平田と池が宥めるが、幸村は憤怒したように声を荒げ続けている。

堀北は何やら考え込んでいるようだ。

「いい加減落ち着けて。Bクラスに上がったんだからいいじゃねえか」

「こっちはクラス分けの時点で納得がいてないんだ!」

池の言葉は幸村には届かない。

しょうがない。ここは僕が対処することにしよう。

「幸村くん」

「なんだ桜庭——あいたつ！」

僕は幸村のおでこにデコピンをした。

「なにをするんだつ！」

「落ち着きなよ。女子たちが怯えてるよ」

「え……」

僕は数人の女子を指さした。

佐倉、みーちゃんなど全員が大人しい生徒たちだ。

「悔しいのはわかるけど、ここで声を荒げてても仕方ないでしょ」

「……すまない。冷静じゃなかった」

頭を下げて謝罪をする幸村。

自分の非を認めて素直に謝れるのだから大したものだ。

「仕方ないよ。幸村くんは小テストでも一番だったんだから。Dクラスに配属されて不満があるのは当然だよ」

「……そうだな。今度、茶柱先生に理由を訊いてみる」

「うん」

そう言って、幸村は自席に戻っていた。

僕も自席に戻ろうとしたところ、平田に連れられて教壇に立たされた。

僕が平田に腕を掴まれた際に、小野寺が鼻血を出していたが気にしないことにする。

平田は、今後ポイントを増やすためにどうしていくべきか話し合いをすることと告げ、クラスメイトに参加するよう声掛けをした。

放課後。朝の告知通り平田は教壇に立ち、黒板を使つて対策会議の準備を始めていた。

堀北、高円寺以外は全員参加しており、原作より何百倍のまとまりを感じた。

平田が準備してる間、クラスメイトを観察したが、ポイントの貸し借りをしている生徒は見受けられなかった。

いざ話し合いが始まるタイミングで綾小路が茶柱先生に呼び出しを受けた。

原作の主人公抜きで話し合いが始まった。

僕はすぐに平田に意見を求められたので、中間テストなどクラスポイントが増えるイベントがあると予想したことを伝えた。

結局、僕以外に大した意見は出ず、中間テストに向けて勉強会を実施されることだけが決定し、作戦会議は終了した。

☆☆☆

「ふう……」

僕はお風呂場に入ってシャワーを浴びると、思わず溜息をつく。

今日は色々あった。

Bクラスへの昇格。腐女子の発見。茶柱先生の呼び出し。

そう。

僕も茶柱先生に呼び出されたのだ。

作戦会議が終わり、帰宅しようとしたところ、綾小路に呼び止められ、職員室に行く

よう言われた。

話の内容は、今後もクラスを引っ張っていくように、と簡単なものだった。

「ああ、気持ちいい……」

帰りに急な雨に降られたので、濡れて冷えた身体には、温かいシャワーはしみる。

僕は降り注ぐ温かいお湯に身を委ねていた。

すると、突然背後で浴室の扉が開いた。

「……桔梗？」

振り向くと、そこには全裸の桔梗が立っていた。

「どうしたの?」

「要と一緒に風呂に入ろうと思って……だめ?」

「いいよ。おいで」

そんな可愛い顔でお願いされたら断ることは出来ない。

「うっ……」

まじまじと桔梗の裸体を見ると、股間のペニスが大きくなってしまった。

こればかりは男としてどうしようもないことだろう。

そんな僕の股間を見て、桔梗は少し顔を赤らめながら、歩みよってきた。

「要ったら……こんな大きくしちゃって」

「……ごめん」

謝る僕に構うことなく、桔梗は僕の前まで来るといきなり大きな乳房で勃起したペニスを挟みこんでくる。

「うっ……」

その柔らかな感触に、僕は思わず仰け反ってしまった。

そんな僕を上目遣いで見つめながら、ぎゅっとペニスを締め付けてくる。

「要、……これ、気持ちいい?」



「あ、ああ……すごく気持ちいいよ……」

僕がそう答えると、桔梗は嬉しそうな表情を浮かべ、ペニスを挟み込んだ乳房を上下に揺らしてきた。

「んっ……ふうん……んっ……んっ……んっ……」

締め付けられ擦られる感触に、僕は思わず身悶える。

そして谷間のペニスは激しく脈打ちながら剛直していった。

「ああ……大きくなつていくね……えへっ♡」

「桔梗……あっ……」

勃起していく僕のペニスに興奮したのか、桔梗はエッチな声を漏らしながら乳房を上下させてくる。

その柔らかな感触に、僕はゾクゾクしてしまった。

「すごい、気持ちいい……」

「要に喜んでもらえて嬉しい……だからもつと……気持ちよくしてあげるね……んっ、んんっ♡」

僕が興奮するほどに、桔梗も強く胸を寄せながら上下させる。

乳房が圧迫されて擦られると、オナニーやセックスとはまた違った快樂があった。

なんとも言えない柔らかな感触、そしてこの暖かさ。

「はぁ……はぁ……」

あまりの快感に僕は思わず息を荒げていった。

桔梗の谷間に挟まれたペニスは、すっかり熱くたぎってしまった。

そして谷間から顔を出したペニスの先っぽからは、我慢汁がジワリと溢れ出してきていた。

「要の……先っぽからこんな溢れてる……♡」

桔梗は、そんな僕のペニスを見つめて熱い時を漏らす。

その息が敏感な亀頭にかかる、さらに僕は高まってしまった。

「桔梗、やばっ……」

ペニスは乳房の間で強く脈打ち跳ねる。

そんな僕のペニスを押さえつけるように、桔梗は柔らかな胸を寄せてきた。

「んしょ……どうっ?」

「すごい……いいよ……」

「それじゃ、もっといっぱいしてあげるねっ♡」

桔梗はどこか楽し気にそう呟くと、さらに乳房を激しく上下させてくる。

「うおっ……!」

柔らかな乳房がペニスをしごいてくる感触は強烈な快感を僕に与えてきた。

あまりにも気持ちがよくて乳房の谷間で僕のペニスは激しく脈動し我慢汁が止めどなく溢れ出してしまふ。

「んっ……ふうんっ……んんっ……いっばい出てる♡」

桔梗は亀頭から溢れ出た汗を谷間に塗り付けてローションの代わりにすると、締め付けながら上下に揺らした。

まるで搾られるようなその刺激に、僕は思わず腰を震わせる。

「やばい……もう出ちゃいそう……」

「出しているよ♡ 遠慮しないで……んっ、んんっ♡」

桔梗は、乳房を上下させるほどに興奮してきているようだ。

乳房の先では乳首がすっかり尖ってきていて、声も色っぽい感じになってきている。

「んっ、あんっ♡ んっ、ああっ♡ んあっ、ああんっ♡」

とうとう喘ぎだした桔梗。

そんな彼女の姿に興奮して、僕はより高まってしまった。

込み上げてくる感覚も強くなる一方で、思わず身体が震えだす。

「か、要の……すごい……熱くなってる♡ ビクビクして……あっ、あんっ♡ はあんっ♡」

桔梗が興奮するほどに、乳房の動きも激しくなってきた。

思いつきりペニスを締め付けながらしごいてくる乳房に、僕は一気に高まって我慢できなくなっている。

「も、もう……出るっ……」

「ああっ、要っ……出してっ……出してえっ！」

「うあっ……！」

たまたら僕は込み上げてくるままに、桔梗の乳房の間で射精した。

「ああんっ♡ 出たあっ♡ 要の……出てるっ♡」

僕が出した精液は、桔梗の顔と胸元をべとべとに汚した。

「あっ、ああっ……まだ出るっ♡ 要のいっぱい、出てるよお♡ んはああんっ♡」

僕が射精するたびに、桔梗は乳房でぎゅつとペニスを強く締め上げてきた。

まるで搾り取られるような感触に、僕は何度も射精を繰り返してしまふ。

「んっ、んふう……すごい量♡ んんんっ♡」

桔梗は大量に出た精液を舌先で舐め取った。

「うふっ……んっ……すごい濃いよ♡ おいひい……♡」

「桔梗……」

精液塗れの上に、舐め取ってエッチな表情を浮かべる桔梗。

僕はそんな桔梗の姿に、最後の一滴まで迸らせた。

「あああああ……す、すごいつ♡ まだ出て……んっ、はああ……♡」

あまりにも大量に出してしまったせいかな、僕はすっかり息を切らしてしまふ。

そんな僕を見つめながら、桔梗は蕩けた表情を浮かべた。

「元気になった……?」

「もちろん」

「要、疲れてそうだったからね」

「ありがとう」

元気を出させるためにパイズリはどうかと思うけど、気持ちよかったので何も言わないでおこう。

「……どうしたの?」

顔と乳房がザーメンにまみれた桔梗を見下ろす。

なんて下品な姿をしているんだろう。

そんな桔梗を見続けると、ペニス元気が取り戻していくのがわかった。

「あ、あれ……? 要、また大きくなって……」

「うん、桔梗がエロいから元気になっちゃった。……いいよね?」

「……うん、いいよ♡」

桔梗は四つん這いになり、大きなお尻を向けてくる。

「要のおちんちんで……私のおまんこ……めちやくちやにしてね」  
「っ……………」

その一言が僕の理性を葬り去った。

僕は夕食を食べるのも忘れて、桔梗に精液を出し続けた。

桔梗も気分が乗ってきたようで、淫乱な言葉を発しながら、僕の肉棒を受け入れ続けた。

とても人には見せられない痴態を晒しながら僕と桔梗は何度も絶頂した。

## 6話 僕と桔梗の勉強会

池たちを手懐けた僕は、次に須藤を攻略（もちろん恋愛という意味ではない）するこ  
とにした。

桔梗のおかげで須藤も遅刻、早退、授業中の居眠りはしなくなったが、彼の学力だと  
テスト勉強を真面目にしなければ赤点は確実だろう。

週明けの月曜からクラスで勉強会を行う予定となっており、僕は須藤に勉強会に参加  
させるために動いた。

「須藤くん、ちよつといいかな？」

昼休み。桔梗との昼食を早めに切り上げ、教室に戻った僕は須藤に声を掛けた。

「おう、どうした？」

須藤は嫌な顔もせず応じる。

池たちに嫌われていた僕だけど、須藤にはそこまで嫌われていなかったのだ。

恐らく、体育の授業でバスケの紅白戦をした際に、好プレイを連発した僕に好感を抱  
いてくれたのだろう。

「来週から中間テストに向けた勉強会を行うんだけど、須藤くんも参加してほしいんだ」

「わりい、部活があるから無理だ」

「でも赤点をとつたら退学だよ？」

「うっ……」

僕たちは茶柱先生から赤点をとれば即退学になることを説明されている。

「退学になったらバスケットをする場所は限られるんじゃない？」

日本は気軽にバスケットをプレイできる場所は少ない。

一部の公園にはバスケットゴールが設置されているところがあるが、須藤の実家の近所にあるとは限らない。

「もし本当にプロになりたいなら高校は退学しちゃ駄目だよ」

僕は高校を退学した場合のデメリットを説明した。

「それにプロを目指すなら勉強も頑張った方がいい」

「なんでだよ？」

「プロの選手の大半が大卒だからだよ」

「……そうなのか？」

「知らなかったんだ……」

須藤はメジャーの茂野五〇タイプだと見た。

球技そのものは愛してるし、明確な目標があるけれど、プロの情報を知らなさすぎる。



「でもバスケットが上手ければ大学に入れるんじゃないかねえのか？」

「確かにそうだね。でも最低限の学力を求められる場合もあるから」

「そうだったのかっ!?!」

これは僕のでっち上げだ。

そもそも転生前も高校一年生の僕にスポーツ推薦の情報はそこまで持ち合わせていない。

だが単純な須藤なら僕の話の話を信じてくれるだろう。

「もし須藤くんが入りたい大学からスカウトが来て、学力が足りずに、入学できなかったら嫌でしょ?」

「そうだな……」

「それに本気で上を目指すなら英語は頑張らないとでしょ」

「え、英語……?」

もう須藤は落ちる寸前だ。これで止めを刺す。

「バスケットリーグの最高峰、NBAを目指すんじゃないの?」

「っ……」

「日本もプロリーグができて盛り上がってるけど、レベルもお金もアメリカには遠く及ばないでしょ」

「え、NBA……」

「違った？ てつきりプロとか言ってたからNBA目指してると思ってたんだけど」

「そ、そうだよ……俺はもともとアメリカでバスケットをするのが夢だったんだ……」

「そうだったんだ。なら英語はマスターしないと」

「おうっ！ わかった！ 俺も勉強会に参加するぜ！」

「……ありがとう」

これで須藤も攻略完了だ。

あとは僕と桔梗が丁寧に勉強を教えれば赤点をとることはないだろう。

彼らには平均60点以上は取ってもらおう。

僕たちはBクラスになったので、原作と同じギリギリな点数じゃだめだ。

クラスの平均点を大幅に上げて、僕たちがBクラスになったのがまぐれじゃないとみんなに示すんだ。

☆☆☆

「須藤くんも勉強会に参加してくれるって」

「そうなの？ 要、凄いねっ」

須藤の了承を得てすぐに僕は桔梗の席に向かって報告をした。

「バスケットを餌にしたらすぐに落ちてくれたよ」

「要、悪い顔してるよ」

他人に聞かれないよう小声で言ったら、人相を突っ込まれてしまった。

「……そんな悪い顔してた？」

「うん。でも今はいつもの顔に戻ってる」

「そっか。……桔梗も僕みたいな顔してたの？」

「どうだろうね」

はぐらかされた。

いつも僕に笑みを絶やさないと桔梗だけど、たまには黒い桔梗も見たい。

「それより本当にいいの？」

「なにが？」

「僕と一緒に須藤くんたちの勉強を見てもらうことだよ」

桔梗は池や山内を嫌っている。

最近は二人の言動はマシになってきたけれど、嫌悪感はなかなかぬぐい切れないものだ。

「大丈夫だよ。だって要のお願いだし」

「ありがとう」

「ううん、その代わりテスト勉強中も愛してね」

「……ほどほどにね」

池たちに勉強を教えるのを手伝ってくれる対価として、僕はテストの二日前まで、桔梗を抱かなければならない。

桔梗とのセックスは気持ちよすぎるので、勉強した内容が頭から消えないか心配だ。

「桔梗」

「なに？」

「第一の難関を突破した記念にデートしようか？」

「するっ！」

第一の難関とは須藤を勉強会に参加させることだ。

勉強会が始まれば、桔梗との時間は減る。

なので僕は勉強会が始まるまでは桔梗を目一杯愛でることにした。

「ラブラブだな」

自席に戻ると綾小路が死語を言ってきた。

「久しぶりに聞いたよ」

「死語だったか？」

「そうだね」

「……そうか」

軽くシヨックを受ける綾小路。

「綾小路くんは彼女作らないの？」

「興味はあるが、相手がいない」

「堀北さんは？」

ちなみに堀北は席にいない。なので堂々と彼女の名前を出せる。

「ただの隣人だ。友達すらないらしい」

「それは悲しいね」

「ああ」

「よかつたら綾小路くんも勉強会に参加しない？」

「考えておく」

「うん、頑張った人にはご褒美があるからぜひ参加してね」

「ご褒美？」

珍しく綾小路が食いついた。

「うん、Cクラスの女子との食事会だよ」

「違うクラスの女子とか？」

「桔梗が友達でね。中間テストが終わったなら一緒にご飯をする約束をしてるんだ」  
桔梗は有言実行の女だった。

本日にたったの三日でCクラス（旧Bクラス）の女子たちと友達になったのだ。

しかも相手は一之瀬帆波、白波千尋、網倉麻子、小橋夢の四人。

唯一旧Bクラスで名前が判明してる女子生徒たちだ。

「食事か」

桔梗に他クラスの女友達を作ってもらった理由。

それは池たちに勉強を頑張らせるための餌を作るためだ。

よう実の女キャラは容姿に優れている子が多い。

一之瀬はもちろん、ほかの三人も美少女と言っても過言じゃない。

そんな女子たちと食事ができる。

池たちが頑張らないわけがない。

「……わかった。オレも参加させてもらう」

綾小路の勉強会参加が決まった。

堀北のぼっちルートが開拓されているような気もするけど、気にしないでおう。

☆☆☆

一週間後。中間テストに向けた勉強会が始まった。

僕と桔梗は、綾小路、須藤、池、山内、博士の5人に勉強を教えることになっている。

5人を引き連れて図書室に向かう途中、周りからやたらと視線を感じた。

理由はわかっている。

僕たちBクラスが全校生徒から注目を浴びているからだ。

Dクラスから一気にBクラスに昇格したのは史上初だったようで、上級生もその話題で持ちきりらしい。

「うん〇ドリルかよっ!」

図書室の端で池が叫んだ。

うるさかったので桔梗に注意させると、すぐに大人しくなった。

「君たちは子供だからね、うん〇好きでしょ?」

今度は博士がスカト〇は興味ないと言ってきたので、足を思いきり踏みつけて黙らせた。

「いや、でもこれって小学生が使うドリルだろ?」

「俺たち高校生だぞ」

池と山内がブーブー文句を言う。

「でも基礎が大事だから。それにこのうん○ドリルは桔梗が君たちのために買ったものなんだよ」

「え……?」

嘘である。これは僕が購入したものだ。

「桔梗ちゃんが?」

池が確かめるように問う。

「そうだよ。確かにこんなドリルやらされて馬鹿にされてるかと思うけど、勉強って基礎が一番大事なの。だから使ってほしいな」

「っ……!?!」

ここで桔梗の上目遣い。

これで綾小路を含めた全員が一気に落ちた。

こうして池たちは真面目にうん○ドリル（小学高学年用）と向かい合うことになった。池たちにうん○ドリルをやらせた理由は二つある。

一つ目は、下のクラスの生徒たちに、自分たちはうん○ドリルで勉強をする奴らより下なんだ、と劣等感を与えること。

二つ目は、高校生が真剣にうん○ドリルで勉強しているところを僕が見たかったから。



くだらない理由だと思うけど、僕は性格が悪い人間なのだ。だから桔梗と相性がいいのかもしれない。

もちろんずっとうん○ドリルで勉強させるつもりはない。

明日からは本格的にテスト勉強をする予定だ。

「桔梗ちゃんのうん○ドリル」

山内が呟いた。

気持ち悪いからやめてほしい。幸い桔梗には聴こえてなかったようで、彼女は博士に勉強を教えていた。

小学生の問題を教えてもらう博士もどうかと思うが、やる気があるだけマシとしよう。

初日の勉強会は大きなトラブルもなく無事に終了した。

池と山内が愛おしそうにうん○ドリルを抱えながら帰っていたのが気持ち悪かった。

須藤、博士は桔梗に教えてもらいながらすすい解答していたので、小学生レベルの問題は大丈夫そうだ。

綾小路は一人で黙々と問題を解いていた。

「それじゃ僕たちも帰ろうか」

「うん」

時刻は18時を過ぎていた。

帰宅してから食事を作るのは桔梗も面倒だろうと思ったので、ケヤキモールのフードコートで夕食をとることにした。

僕は醤油ラーメン、桔梗はカレーうどんを美味しく頂いた。

夕食を済ませた僕たちは帰路についた。

帰宅してすぐに桔梗を抱いた。

本当は何発も桔梗の中に出したかったけど、この後にやるべきことがある僕は一発で我慢した。

やるべきこと——それは堀北を生徒会長から助けることだ。

昨晚。久しぶりに予知夢を見た。

内容は堀北が兄である生徒会長に暴力を振るわれるところだった。

原作では綾小路が助けにきたが、この世界では綾小路はぐっすり眠るらしい。

生徒会長に投げ飛ばされた堀北はうめき声をあげながらうずくまる。

最後に生徒会長が絶縁宣言をして去っていき、僕は目を覚ました。

堀北とは親しくないけれど、酷い目に遭うのがわかっていて、助けないのはさすがに心が痛む。

「桔梗、散歩に行ってくるね」

「こんな時間に？」

「うん、一人で考えたいこともあるから」

「一人で？」

「そうだよ。桔梗との将来を考えておこうと思って」

「っ……」

ただ散歩するだけなら、桔梗もついていくと絶対に言うだろう。

だから桔梗が納得してくれる理由を言わなければならぬ。

さらに彼女が上機嫌になってくれる理由なら文句なしだ。

「わ、私との将来……」

「うん。僕は桔梗と真剣に付き合ってるつもりだから」

「わ、私も要とは真剣に付き合ってるよっ！」

「知ってるよ。だからちよつと一人で考えたくて」

「……わかった。でも寂しいからなるべく早めに帰ってきてね……？」

「もちろんだよ」

懇願する桔梗を優しく抱きしめる。

風呂上がりのため、日中よりも清楚で清潔感のある香りがする。

思わず押し倒したくなるけれど、その誘惑を断ち切り、僕は予知夢で見た場所に向

かった。

おそらく生徒会長と対峙することになるだろう。

けれど問題ない。

武力なら——僕は誰にも負けるつもりはないのだから。

## 7話 独占欲

上下黒のジャージに身を包んだ僕は堀北たちが来るまで闇に紛れる。

予知夢で柱時計が映っていたため、堀北が来る時間はわかっていた。

5分ほど待つと堀北と生徒会長がやって来た。

「鈴音。ここまで追つてくるとはな」

「もう、兄さんの知っている頃のダメな私とは違います。追いつくために来ました」

「Dクラスになったと聞いたが、3年前と何も変わらないな」

「もうBクラスです。すぐにAクラスに上がってみせます」

「お前の力でBクラスに上げたのか？」

「それは……」

「違います。堀北は真面目に授業を受けているだけでした。」

「だろうな。お前にクラスメイトをまとめる力はない。それどころかクラスを崩壊させ

る可能性が高いだろう」

「そんなことはっ……っ！」

「ある」

生徒会長は無抵抗な堀北の手首を掴み、強く壁に押し付けた。

「どんなにお前を避けたところで、俺の妹であることに変わりはない。お前のことが周囲に知られれば、恥をかくことになるのはこの俺だ。今すぐ学校を去れ」

恐らくシスコンであろう生徒会長。

いくら妹を成長させるためとは言え、退学させるのは非現実的だろう。

「で、出来ません……っ。私は、絶対にAクラスに上がってみせます……！」

「愚かだな。昔のように痛い目を見ておくか？」

「兄さん、私は……」

堀北の身体がぐっと前に引かれ、宙に浮いた。

そろそろ僕の出番だ。

「そこまでですよ」

僕は堀北を生徒会長から引き離し抱き寄せた。

「——何だ？ お前は」

生徒会長は僕へと鋭い眼光を向ける。

「さ、桜庭くんっ!？」

「やあ、堀北さん。こんばんは」

「なんであなたがここに？」

「散歩してたんだよ」

初めて桔梗以外の女子を抱き寄せたけどいい匂いがする。

こんなところ桔梗に見られたら怒られそうだ。

「つ……、離してっ……!」

「あ、ごめんね」

僕に抱き寄せられることに気付いた堀北がぱつと離れた。

「そうか、お前が桜庭要か」

「僕のこと知ってるんですか？」

「ああ」

「やっぱり僕たちのクラスって注目されているんですね」

「そうだ」

「それよりいくら妹だからって女の子に暴力はいけないんじゃないんですか？」

予知夢ではコンクリートに打ち付けられた堀北。

おそらく打撲程度の怪我は負っていたはずだ。

「これは家族の問題だ。お前には関係ないだろ」

「堀北さんはうちのクラスの大切な戦力です。だから関係あります」

「やめて、桜庭くん……」

堀北の絞り出した声。

こんな弱弱い堀北を見るのは初めてだったので軽く興奮してしまう。

「とりあえずお開きにしません?」

そう言った直後だった。とてつもない速度の拳が、僕の顔目がけて飛んでくる。僕は紙一重でかわし、急所であろう顎を目がけて回し蹴りを放つが、腕をクロスさせた生徒会長に防がれてしまった。

「へえ、やりますね」

防がれるとは思ってなかった僕は素直に感心した。

空手と合気道の達人であることは知っていたけど、喧嘩慣れもしているようだ。

「それはこっちの台詞だ」

「続きやりますか?」

「……いや、またの機会にさせてもらおう」

「それは残念」

堀北の目の前で生徒会長を倒したかった。

憧れている兄貴の無様な姿を堀北に見せつけ、彼女の成長に繋がったんだけど残念だ。

「鈴音、お前に友達がいたとはな。正直驚いた」



「彼は……友達なんかじゃありません。ただのクラスメイトです」

「そうです、堀北さんに友達なんて一人もいません。ぼっちですから」

僕は親切心で妹の状況を報告した。

「相変わらず、孤高と孤独を履き違えているようだな」

「そうなんですよ。いつも不機嫌そうな顔してますし。このままじゃ社会人になってもすぐに孤立するでしょうね」

「あ、あなたね……」

好き放題言われ続ける堀北が僕を睨んだ。

「そういえば生徒会長も愛想ないですね。そこだけは兄妹そっくりだ」

今度は二人同時に睨まれた。

なんだ、やっぱり仲が良いじゃないか。

「……面白い奴だ。これからも俺を楽しませてくれ」

生徒会長はそのまま僕の横を通り過ぎ、闇へと消えていった。

堀北の兄貴が去り、夜の静けさに包まれた。堀北は窓際に座り込んで俯いてしまっている。

「それじゃ僕は帰るね」

「……待って」

「なに？」

「最初から、聞いていたの……？ それとも偶然？」

「偶然だよ。散歩してたら堀北さんの声が聞こえたから、気になって見にきただけなんだ」

また、堀北は黙り込んでしまう。

「桜庭くんは、格闘技をやっていたの？」

「うん、やってた」

転生前の僕は小一から空手と柔術を習っていた。

小さい頃は女子にしか見えなかった僕を学校でいじめにあわないか心配した母親が、自分の身を守らせるために道場に通わせてくれたのだ。

「そう。……初めて兄さんと渡り合った同級生を見たわ」

「そうなんだ」

「ええ。……そろそろ戻りましょう。この場を誰かに見られたら誤解を生みかねないし」

「そうだね」

原作ルートから外れてしまった堀北が、これからどう変化していくか楽しみだ。

## ☆☆☆

「ただいま」

「おかえり」

笑顔で出迎えてくれる桔梗。

「思ったより早かったね」

「うん、桔梗の顔が見たくなつたから早めに切り上げてきた」

「もうっ♡」

すっかりバカツプルの会話にも慣れた。

転生前は馬鹿にしていたけれど、好きな人との会話は楽しいものだ。

「それより桔梗に報告したいことがあるんだ」

「なに？」

僕は先ほどの出来事を包み隠さず報告した。

桔梗と結ばれてから僕は自身にルールを作った。

それは——桔梗に隠し事をしないことだ。

「堀北さんとお兄さんが……」

原作では堀北を退学に追い込もうとする桔梗だが、この世界では僕にしか興味がない

ので、堀北のことは一切話題にならない。

「それで堀北さんは？」

「寮に帰ったよ」

「そっか。怪我しなくてよかったね」

「うん。さすがにクラスメイトが傷つくのは見たくないからね」

「要は怪我しなかった？」

「もちろん」

あのままやりあえば軽傷を負っていたかもしれない。

「よかった。あまり無茶しないでね」

「しないよ。僕が無茶するのは桔梗のためだけだよ」

「そ、そっか……。えへへ……」

桔梗は嬉しそうに笑うと、僕の首に手を回した。

それから目をつぶり、少し顎をあげる。

「んー」

催促するような声。

桔梗の可愛らしい仕草に癒された僕は彼女の唇にキスをした。

唇を離すと、桔梗の幸せそうな顔が見える。

「もつと」

「わかったよ」

僕たちは何度も何度も触れるだけのキスを繰り返した。

☆☆☆

夜中。彼の腕の中で眠っていた私はふと目が覚めた。

要の腕の中は、香りに包まれる感じがして、安心感を誘うので、夜中に起きることはなかったのに珍しい。

原因は——堀北だろう。

私と同じ中学出身のクラスメイト。

私と堀北の関係はそれ以上でもそれ以下でもない。

もしかしたら私の過去を知っているのかもしれないけど、そんなのどうでもいい。彼女が暴露しようとしまいと興味がない。

私は要さえいればいいのだから。

でも彼女が要に関わるなら話は別だ。

もちろんクラスメイトなので多少関わることはあると思う。

でも今回は違う。

堀北は———to 要に助けられたのだ。

実の兄に暴行されそうになった？

要が助けなければ大けがをしていた？

そんなの関係ない。

要に助けられやがってあのクソアマ。

武道を嗜んでるんなら自分で何とかしろアバズレ。

私は、私以外の女が要に助けられるのが許せない。

でも要は悪くない。

だって要は優しいから。

悪いのは助けられた堀北の方だ。

あの女のことだから助けなんて求めていないって言うんだろう。

違う。

あんたが助けを求めようが、求めないが関係ない。

要の目に付くところでトラブルに遭ったあんたが悪い。

要は私のものだ。

私だけのヒーローだ。

私以外の女は他の男に助けられている。

「それと……要が無傷でよかった……」

もし要が傷ついていたら。

そしたら私は堀北兄妹を殺していたかもしれない。

要が傷ついていいのは、私のためだけ。

他の女のために要が傷つくなんて許せない。

「要は自分と私だけを大切にすればいいんだからね」

熟睡している彼の頬に軽く口づけをした私は再び眠りの世界に入った。

☆☆☆

「あつ、あんっ♡ んあつ♡ あああんっ♡」

翌日。僕は珍しく早朝から桔梗を抱いていた。

いつもならフェラとパイズリと手コキで抜いてもらって終わりなのだが、今日は下のお口にも欲しいとおねだりをされた。

「やつ、そこっ、気持ちいいっ♡ ああんっ♡」

僕は桔梗を浴室に連れ込み、壁に手をつかせ、後ろから激しく突き上げている。

「ああんっ♡ 大きいっ♡ はううんっ♡」

遠慮なく膣奥へ向けて肉棒を強く突き込み、子宮をグニグニと押し潰す。

「あひいいんっ♡ それ、すごっ♡……♡ んはあああっ♡」

桔梗は体を仰け反らせ、高い声を上げた。

「朝から凄いいね」

「か、要が激しいから……ひいああっ♡」

昨日は一発だけで物足りなかったのか、桔梗は早朝から官能全開だ。

僕は突くたびに大きく揺れる桔梗の乳房を鷲掴みした。

「はうんっ♡ お、おっぱいも……気持ちよくひてえっ♡」

「もちろんだよ……!」

乳房が歪な形になるまで指に力を入れる。

「ひゃんっ♡ はひいいっ♡ んおおおっ♡」

刺激を与えるたびに桔梗は、甲高いよがり声をあげる。

「そろそろ出すよ……!」

「うんっ、出してっ♡ 私の中にたくさんっ……♡」

「うくっ……!」

「きやううううううううっ♡」



肉棒の奥が痙攣し、大量の精液が吹き出した。

桔梗の膣内はすぐに白濁液でドロドロになっていった。

「ああ……………あつ……………す……………い……………♡」

ガクガク腰を震わせた桔梗は絶頂の余韻に浸る。

「桔梗、気持ち良かったよ」

「私も……………すごく気持ちよかった……………」

桔梗の頬にキスをし、肉棒を抜こうとした瞬間だった。

「だからもつと……………しよ？」

振り向いた桔梗は蕩けた表情で誘った。

「時間大丈夫かな？」

「大丈夫だよ。登校まで一時間以上あるから……………だから……………」

「わかったよ」

そんなにおねだりされたら断れるわけがない。

僕は性欲全開な彼女を満足させるため、桔梗が白目を剥くまで激しく打ち続けた。

今日の桔梗は本能に忠実だった。

子宮にたつぷり精液を注ぎ込まれた桔梗は、学校でいつも以上にべったりだった。

昼休みは屋上に連れていかれ、カメラの死角になる場所で、10分以上も唇を貪り

あつた。

放課後の勉強会が終わり、夕食をとらずにまっすぐ帰宅すると、玄関先で桔梗に押し倒された。

そのまま僕たちは夕食をとらず、お互いの制服が汚れるのも忘れるほどに、身体を重ね続けた。

## 8話 冴えない堀北の育て方

勉強会を始めてから一週間が過ぎた。

僕と桔梗の力により三馬鹿+博士の学力はぐんぐん上昇している。

テスト範囲の変更は茶柱先生から報告があった。原作では黙っていた先生だったが、Bクラスに上がったことにより、やり方を変えたいらしい。

原作ヒロインたちとも進展があった。

堀北は以前より話しかけられるようになったが、僕と綾小路以外とは一切絡まない。佐倉は毎日挨拶をしていたおかげで、軽く世間話は出来るようになった。

軽井沢とは廊下でぶつかって転倒させてしまい、赤色の派手なパンツを披露してもらった。

なお、ほかのクラスの女子とは一切絡んでいない。

桔梗とは毎日交わっている。

さすがに早朝セックスはあれ以来していないが、夜になると獣のようなセックスをしている。

ほかのヒロインと仲良くしているのが気に入らず嫉妬しているのだろう。

だから激しく求められる。

予知夢で悲惨な目にはあつていないので、現状は問題ないと認識している。

中間テスト五日前。僕は桔梗に過去問を入手するようお願いをした。

僕でも問題ないだろうけど、美少女で愛嬌がある桔梗の方が効率がいいだろう。

予算は2万ポイントだったが、桔梗は1万ポイントで入手してきた。昨年実施された小テストの解答用紙付きで。

「凄いね桔梗は」

放課後。僕は期待以上の成果を上げた桔梗の頭を撫でていた。

「えへへ。だって要にお願いされたんだもん」

「お礼に今夜はいつも以上に可愛がつてあげるね」

「うんっ」

ちなみに場所は人気のない体育館裏だ。

いくら僕たちがバカツプルでも、人前でここまでいちやつきはしない。

「それでいつ教えるの？」

「前日かな」

「なんでそんな遅くに？」

「早く教えると勉強しなくなってしまうからね」

「……なるほど」

三馬鹿と博士は過去問を入手しようと勉強は続けるだろう。

なぜならCクラス女子とのお食事がかかっているのだから。

彼らには平均60点以上取れば、お食事会に参加できると伝えてある。

心配なのは平田が教える勉強会に参加している生徒だ。

おそらく半数以上は平田目当てだろう。

過去問があるとわかれば、勉強ではなく平田に熱い視線を送ることに集中しそうだ。

「それじゃそろそろ図書室に行こうか」

「うん」

桔梗と二人で図書室に向かう途中で、一人の美少女とすれ違った。

その美少女は、すれ違う僕に意味ありげに微笑した。

恐らくターゲットとしてロックオンされたのだろう。

その美少女の名前は——坂柳有栖。

原作の主人公である綾小路に執着する天才だ。

それにしても美しかった。

それは見た人の心の中の最もデリケートな部分にまで突き通ってしまいそうな美し

さだった。

巨乳派の僕でも見惚れてしまうほど綺麗だった。

「今のAクラスの坂柳さんだよな？」

「うん。どうやら僕たちは目をつけられたみたいだね」

「目をつけられたのは要だけだよ」

気を遣って言ったが、桔梗も気づいてたらしい。

近々、彼女と接触しそうな気がする。

僕の第六感がそう告げていた。

図書室に入るとCクラスとDクラスの男子が揉めていた。

それを遠巻きにして見る須藤たちが「図書室では静かにしてほしい」と言っていたので、腹を抱えて笑いそうになってしまった。

二人の男子はヒートアップしていったが、一之瀬が仲裁に入り、場を収めてしまった。

僕としては殴り合いになるまで発展して、互いのクラスポイントが引かれるのを期待したのだけれど、そう上手く事は運ばない。

「残念」

「要、また悪い顔してるよ」

「おっと」

桔梗は僕のことをよく見ている。

よくできた彼女に注意された僕はすぐにいつもの顔つきに戻した。

「桔梗ちゃん、騒がしてごめんね」

直後に、一之瀬が桔梗のもとにやって来た。

「ううん、大丈夫だよ」

「そう言ってもらえると助かるよ。あつ、桜庭くんだよね」

「うん、初めまして」

「初めまして。私は一之瀬帆波。君のことは桔梗ちゃんからよく聞いてるよ」

「やめてよ、帆波ちゃんっ」

桔梗は僕の指示で一之瀬と友達になっている。

それにしても、もう互いをちゃんづけで呼んでいるのか。

二人のコミュニケーション能力の高さに僕は敬意を表した。

「桔梗ちゃんから聞いてると思うけど、今度の食事会、楽しみにしてるからねっ」

「僕もだよ。お互い中間テスト頑張ろう」

「うんっ。それじゃまたねっ」

一之瀬は微笑みながら自身のクラスメイトのもとに戻っていった。

「今のがCクラスの一之瀬帆波か」

「可愛いな」

「美少女過ぎて驚いたでござる」

「流川は洋楽を聴いてるのか。俺も聴いてみるか」

我がBクラスにも一之瀬帆波の名前は知れ渡っていた。

池、山内、博士は初めて間近で見た一之瀬に見惚れているようだ。

須藤は漫画じゃなくて教科書を読みたまえ。

☆☆☆

「綾小路くんは一之瀬さんのことどう思う?」

勉強会終了後。僕は珍しく綾小路と二人で帰路につく。

桔梗はみーちゃんから相談事があるらしく、一足先に寮に帰ってしまった。

「どうとは?」

「可愛いと思うかってことだよ」

綾小路は堀北と桔梗以外の女子とまったく絡んでいない。

いくら根暗とは言え、イケメンランキング6位の逸材だ。ちなみに僕は平田を抑えて

2位だった。

原作で桔梗もイケメンと評していたし、女子たちが放っておかないと思うんだけど。



「そうだな。容姿は優れていると思う」

「彼女にできるならしたい？」

「わからない。一回も話したことないからな」

「そっか」

「なんでそんなこと聞くんのだ？」

「以前に彼女が欲しいと言ってたからだよ」

「……そんなことも言ったな」

綾小路と一之瀬が付き合ったら面白い展開になりそうだ。

原作では軽井沢と付き合うことになったけれど、原作と同じじゃつまらない。

僕は転生してからずっと考えていた。

転生したこの世界でどう生きていくか。

原作をなぞって、知識を活かしつつ、イベントをこなしていくか。

原作の流れを壊して、自分のやりたいように進んでいくか。

僕は——後者を選んだ。

せっかく第二の人生を与えてもらったんだ。

やりたいようにやる。

原作と違う選択肢を選んで、新しいよう実を楽しんでいく。

だから僕はDクラスをBクラスに引き上げた。

須藤たちを育成することにした。

堀北の成長イベントを潰した。

この先どうなるかわからない。

予知夢でわかってしまう未来もあるけれど、神様にもらった特典なので、割り切って利用させてもらう。

「桜庭はどうなんだ？」

「僕には桔梗がいるから」

僕を病的なまでに愛する桔梗と付き合っていくには予知夢は必要だ。

今は順調に交際しているけれど、いつ地雷を踏むかわからない。

原作イベントには最小限、桔梗には最大限に予知夢を利用する。

「そうだな。彼女がいるならほかの女子に手は出せないな」

「そうだよ。綾小路くんはフリーなんだからどんどん手を出さないと」

「その言い方だとオレが女好きに聞こえるんだが……」

「言い方が悪かったかな、ごめんね。でも彼女が欲しいなら自分から動かないと駄目だよ」

「……善処する」

「うん」

きつと綾小路が自分から動くことはないだろう。

動くとすれば一之瀬を利用できる駒として判断したときだけだ。

そして利用価値がなくなれば、容赦なく切り捨てる。

予知夢がなくても、綾小路とヒロインの未来は簡単に想像がついてしまう。

「とりあえず中間テスト頑張ろうね」

「そうだな」

☆☆☆

木曜日の放課後。いよいよ明日は中間テスト本番だ。

ホームルームを終え茶柱先生が教室を出た後、僕と桔梗は教壇に立った。

そしてクラスメイトに過去問を入手したこと、毎年ほぼ同じ問題だったことを説明し、全員にプリントアウトした過去問を渡した。

もちろん全員が僕と桔梗に感謝した。

「ちよつといいかしら」

プリントを配り終え自席に戻ると堀北が声をかけてきた。

「なにかな？」

「過去問を入手したのはあなたの考え？」

「そうだけど」

「……そう。私にはそういった考えはなかったわ」

「堀北さんの実力なら過去問は不要だからね」

「よくわかつてるじゃない」

堀北の辞書に『謙虚』という言葉はないのだろうか。

「でもみんなをAクラスに上げるには、その考えに至らなければならなかった」

「……そうだね」

「だからその点はあなたのこと認めてあげるわ」

「ど、どうも……」

どこまでも上から目線だなこの子は。

「それと須藤くんたちは赤点をとらずにすみそうなのかしら？」

「もちろん。過去問がなくても40点以上は取れたはずだよ」

「すごい自信ね」

「威張れる点数じゃないけどね」

一週間で猛勉強して最低ラインが40点以上なのは情けないことだ。

これまでどれだけ勉強していなかったかよくわかる。

「中間テストが終わったらあなたに話があるの」

「交際の申込ならお断りするよ」

「殴りたいの？」

「これぐらい冗談で返せないと社会で通用しないよ」

「殺されたいのね」

「生きたいです」

コンパスを手にした堀北を見て、僕は後ずさりした。

「まったく……。それじゃありがたくこれは頂いていくわ」

「うん。明日はお互い頑張ろうね」

「ええ。それじゃまた明日」

先ほど受け取った過去問のプリント用紙を片手に堀北は教室を後にした。

（桔梗はみーちゃんたちに捕まってるか）

おそらく直接感謝の言葉を頂いてるのだろう。

解放されるまで教室で待つか考えていると、今度は松下と佐藤がやって来た。

「桜庭くん、過去問ありがとう」

「これのおかげで明日何とかかなりそうだよ」

実はハイスペックの松下は必要なかっただろうけど、お馬鹿の佐藤には天の恵みになっただろう。

「ううん。クラスの平均点が上がればクラスポイントも上がる可能性もあるから頑張ろう」

「うんっ。それじゃ私はこれで」

暗記するためか、佐藤はすぐに去っていった。

「桜庭くん、一つ聞いてもいいかな？」

「なんだい、松下さん」

「このことはいっthinkいついたの？」

松下は見定めるような目で僕を見つめてくる。

「一週間前かな。最初は参考程度になればいいと思ってたんだけど、小テストが全く同じ内容だったから、これをくれた先輩に中間テストの問題構成も聞いてみたんだ」

「それで毎年ほぼ同じ問題だったことに気づいたんだ」

「うん、ラッキーだったよ」

僕にとってラッキーだったのは桔梗のおかげで苦勞せずに過去問を入手できたことだ。

「そっか。……桜庭くんがいるならAクラスに上がるのも時間の問題かな」

「僕だけの力じゃ無理だと思ふよ。みんなが力を合わないとね」  
「……そうかもね」

これは事実だ。いくら僕が一人で頑張ってもAクラスに上がるのは容易じゃない。だから僕は須藤たちを育成している。

「それじゃ私も帰るね。また明日」

「うん、またね」

そう言つて、松下は篠原を連れて帰つていった。

今日はいろんな女子に絡まれる。

「要」

みーちゃんから解放された桔梗が駆け足で来た。

「桔梗、話は終わったの?」

「ううん、もう少しかかるから先に帰つていいよ」

「わかった。相談事?」

「うん。心ちゃんが明日のテスト不安らしくて、少しだけ勉強を見てあげることになつて」

「そつか。それじゃ先に帰るよ」

「帰ったらすぐに夕食作るから」

「わかった。風呂は沸かしておくね」

「お願い」

桔梗に別れを告げ、下駄箱で靴に履きかけていると、今度は違うクラスの女子に声を掛けられた。

「やつほ、桜庭くん。今から帰り？」

1年Cクラスの一之瀬帆波だった。

桔梗がいないから、堂々と見惚れることができる。

「うん。一之瀬さんも？」

「そうだよ。桔梗ちゃんと一緒にじゃないの？」

「友達の勉強を見てあげるんだって」

「そうなんだ。よかったら一緒に帰らない？」

「いいよ」

本当に今日はいろんな女子に絡まれる。

「またね、一之瀬さん」

「一之瀬、お先」

帰路につくと、生徒たちに次々と声を掛けられる一之瀬。

「大人気だね」



「そんなことないよ。挨拶されるのは当たり前でしょ」

「最近の若者は挨拶がなくなってないから」

「にやはは。桜庭くんも若者でしょ」

ほんぽんと肩を叩かれる。

ナチュラルルにボディータツチするあたり、天然ピツチの素質が垣間見れる。

「桜庭くんは中間テストでクラスポイントがどれくらい動くと思う？」

「入学して最初のイベントだからね。そこまで影響はないんじゃないかな」

「そっか。でも少なからず影響はあると思ってるんだね？」

「少しはね。もちろんこれからたくさんのイベントが待ち受けてると思うよ」

「じゃないとAクラスに追いつけないもんね」

「そういうこと」

僕としては夏休みの試験でAクラスに上がりたいところだ。

「それより食事会なんだけど、大丈夫なの？」

「なにが？」

「ほら、僕たちって一応敵でしょ。それに一之瀬さんたちは僕たちにクラスポイントが

抜かれたわけだし」

「あー、そういうこと。大丈夫だよ」

「そうなの?」

「Cクラスに落ちて少なからずショックを受けてる子もいるけど、まだ始まったばかりだからね」

確かにまだ三年近く時間はある。

僕たちBクラスとの差もわずかだし、悲観的になる内容ではない。

「それに基本的に学校生活を楽しむのをモットーにしているから」

「そっか。なら気にしないでおくよ」

「うん。私たちもほかのクラスとの交流を楽しみにしてるから」

もしかしたら平田狙いの子がいるのだろうか。

だったらごめんね。フリーのイケメンは綾小路しかいないんだ。

「一之瀬さんも?」

「うん。あ、よかつたら連絡先交換しない?」

「もちろん」

「ありがとう。……でも、桔梗ちゃんに怒られたりしない?」

「報告すれば問題ないよ」

「ならよかつた」

こうして僕は一之瀬の連絡先を入手した。

本当は食事会の席で入手する予定だったので、思ったより早く入手できたことに内心微笑んでしまう。

一之瀬と連絡先を交換することは必須だった。  
なぜなら、食事会の後で一之瀬は僕に連絡をすることになるからだ。

☆☆☆

中間テストは無事に終了した。

僕たちBクラスは、赤点の生徒を出さなかったのはもちろん、一教科の平均が70点以上と好成績を残した。

僕と桔梗は全教科満点だった。三馬鹿と博士は全教科60点以上と予定通りの成果をあげた。

「それで僕に話ってなんだい？」  
放課後の図書室。

僕は堀北に呼び出されていた。

「桜庭くんにお願いがああるの」

「お願いって？」

「私はこのクラスをAクラスに上げさせないといけない」

上げさせないといけない、か。相変わらず上から目線だ。

「そのために桜庭くんに協力してもらいたい」

「僕に？」

「ええ。あなたは須藤くんたちに勉強を教えて、中間テストで結果を残した」

「僕だけの力じゃないけどね」

「でもあなたがいなければ彼らは退学していたかもしれない」

原作だと君が彼らを助けるんだけどね。

「私はあなたの力を評価している」

「それはどうも」

「だから私の力になってほしいの」

原作の綾小路ポジションを僕が担うということか。

「……それはできない」

僕ははつきり断った。

「つ……。な、なぜ……？」

「なぜって自分より下の人間につきたくないもの。堀北さんだつてそう思うでしょ？」

「私があなたより下だと言いたいのか？」

「そうだよ」

「自分を過大評価しているようね。中間テストの成績は同じだったはずだけれど」

堀北も僕たちと同じく全教科満点だった。

「そうだね。でも堀北さんは何をしたんだい？」

「……なにを？」

「そう。堀北さんは勉強をして好成绩を残しただけ」

「だから何を言いたいのか?!」

僕の意図がわからず声を荒げる堀北。

「だから堀北さんはクラスのために何もしていないってことだよ」

「……っ」

「堀北さんほどの勉強ができる人なら平田くんや僕たちみたいに勉強会を開くことも出来たはずだ」

ちなみに幸村も勉強会を開いていた。

平田ハーレムの勉強会に参加しづらかった生徒たちにとって救いの神だったと思う。

「そ、それは……」

「堀北さんはみんなのことを見下してるでしょ」

先ほどの発言が証拠だ。

自分がクラスメイトをAクラスに導いてあげなければならぬと言ったようなものだ。

「勘違いしてるようだから言っておくね。勉強と運動しかできない堀北さんが一番下の存在だよ」

「なっ……」

僕の評価に目を見開き絶句する堀北。

「だから僕は君の下につくつもりはない」

「……」

「でも君が僕の駒になってくれるなら考えてあげてもいいよ」

「あ、あなたねっ……!」

今の言葉で切れた堀北が僕の胸倉を掴んできた。

「こうやってすぐに手を出すのは兄貴譲りかな」

「兄さんは関係ないでしょ!」

「落ち着きなよ。ここがどこだかわかってる?」

「あっ……」

ここは図書室だ。いくら人が少ないとはいえ声を荒げれば目立つ。

「君がお兄さんに言われたこと、孤高と孤独をはき違えている。よく考えた方がいいよ」

僕はそう言い残し堀北のもとを去った。

彼女は何か言いたげな顔をしていたが、黙って僕を見送った。

「うーん、美少女に怒られるのは嫌なもんだな」

堀北の意識改革をするために僕は彼女を精神的に追い詰めた。

これで少しでも変わってくれば有り難い。

もし何も変わらなければ——僕は堀北を見限る。

いつまでも堀北に構ってられない。

すでに次の獲物は決まっている。

一之瀬帆波。

次は彼女を精神的に追い詰めさせてもらおう。

## 9話 一之瀬の過去

「かんぱーい」

桔梗が音頭を取りドリ๊งクバーで乾杯をしている。

僕たちは金曜日の放課後、ファミレスに来ていた。

面子は僕、桔梗、綾小路、池、山内、博士、一之瀬を含むCクラスの女子4人。

以前から約束していたCクラス女子との食事会である。ちなみに須藤は部活のため欠席だ。

「とりあえず自己紹介から始めようか」

一之瀬の提案により僕たちは自己紹介を始めた。

池たちは入学日と違って相手に好印象を与えられるようになっていた。

これも僕のアドバイスのおかげだ。

それにしてもCクラスの女子4人は全員が美少女だ。

「ねえねえ、桔梗ちゃんと桜庭くんはいつから付き合ってるの?」

自己紹介を終えるとすぐに網倉が訊いてきた。

「小学5年生の頃だよ」



「彼氏作るのはやっ！」

桔梗の答えに網倉が衝撃を受ける。

「もう5年も付き合ってるんだ。長いね」

「麻子ちゃんも彼氏いないの？」

「いないよ〜」

桔梗と網倉が盛り上がっている。

隣に座る男子たちを見ると綾小路以外は緊張しているようで顔がこわばっていた。

僕は池になんでもいいから会話をするよう耳打ちをする。

すると池は持ち前のコミュニケーション能力で会話を盛り上げてくれた。

「過去問入手したの？」

「うん」

いつの間にか僕は一之瀬と二人で話すようになっていた。

「そのおかげでうちのクラスはみんな高得点だったよ」

「にやはは、私は過去問を入手するなんて考えもしなかったな〜」

恐らく過去問を入手する考えに至ったのは龍園くらいだろう。

一之瀬はハイスペックだが性格がまっすぐだ。

「入手できたのは桔梗のおかげなんだけどね」

いまだに網倉と恋愛トークを繰り返している桔梗を横目で見る。

「桔梗ちゃんのこと？」

「男子より女子からおねだりされたほうが嬉しいでしょ？」

「なるほどね。桜庭くんはなかなかの策士だね」

「これくらい誰でも思いつくでしょ」

桔梗の本性を知っているのは僕だけだ。

僕以外の生徒は桔梗のことを絵に描いたような優等生だと思っているだろう。

「私がどうかしたの？」

自分の名前が聞こえた桔梗が会話に混じってきた。

「桔梗ちゃんは可愛いつて言ってたんだよ」

「ちよつと、帆波ちゃんからかわないですよ」

「からかってないよ」

桔梗と一之瀬の和気あいあいとした会話に男子たちはにんまりとしている。

それから二時間ほどして場所をカラオケに移すことになった。

池たちは美少女たちにアピールするために流行の曲を熱唱します。

「綾小路くんは歌わないの？」

「カラオケは初めてなんだ」

「そうなの？」

「ああ」

予想はついていた。

ホワイトルームでカラオケの実習があるわけない。

「歌は興味ない？」

「いや、それなりにあるぞ。CMで聴く程度だが」

「それは聴いたうちに入らないと思うよ」

今度おすすめのアニソンを教えてあげよう。

綾小路なら凜として時〇とか好きそうだ。

「池くん、上手いねっ！」

「マジ？　ありがとう！」

気づくと池と網倉が仲良くなっていた。

「どうやらお互い好きなアーティストが一緒だったようで一気に距離が近づいたらしい。」

まさかこのまま付き合ったりしないよね？

「博士、その曲は入れちゃいけないよ」

博士が『DT捨テル』を入れようとしていたのでやめさせた。

こんな曲を歌われたら、女子たちに引かれてしまう。

「せ、拙者の十八番なのに……」

「女子に嫌われてもいいならどうぞ」

「ぬほーん！」

奇声をあげた博士はしぶしぶ違う曲を選んだ。

ちなみに山内は音痴、博士は普通だった。

「桜庭く〜ん」

ドリンクバーでオレンジジュースを注ぎ込んでいるとコップを片手に一之瀬が来た。

「今日はありがとうね」

「いきなりどうしたの？」

「こんな楽しい場を設けてくれたからそのお礼だよ」

「礼を言うのはこっちだよ」

一之瀬たちと遊ぶのを目標に池たちはテスト勉強を頑張ったのだ。

いい餌になってくれた一之瀬たちには感謝しかない。

「よかつたらまたみんな遊ぶばない？」

「そうだね」

「約束だよ？」

「うん」

なんて眩しい笑顔を向けてくるのだろう。

おそらく桔梗がいなければ僕はその笑顔に心を奪われていただろう。それほどまでに一之瀬の笑顔は素敵だった。

けれど僕は今から壊す。

その一之瀬の笑顔を。

「前から一之瀬さんに聞きたいことがあったんだけどいいかな？」

「うん、なんでも聞いて」

「ありがとう。……一之瀬さんって中学で生徒会長してたよね？」

「っ……」

刹那。一之瀬の顔がこわばった。

「う、うん……。誰かから聞いたの？」

「僕のいとこが一之瀬さんと同じ中学だったんだ」

「……っ!?!」

一之瀬の目は驚愕のために大きく見開かれていた。

「わ、私と同じ中学……」

「うん、前から一之瀬さんのことは知ってたんだ」

「私のことを……」

「だからこうして話すことができて嬉しいよ。そろそろ戻ろうか」  
「あっ……」

僕は不安と恐怖で青ざめている一之瀬を置いて部屋に戻った。  
一之瀬が戻ってきたのはそれから10分後のことだった。

☆☆☆

「池くん、網倉さんと二人でカラオケに行くらしいよ」

「やるね」

「ちなみに誘ったのは網倉さん」

「肉食系女子か」

てつきり池から誘ったと思ったのに。

しかしまいったな。

池を成長させたのは原作より早めに篠原と仲良くさせるためだった。

そうすれば無人島試験で男女間の言い争いが減ると思った。

だがこれはこれで面白い。

また一つ原作とかけ離れたわけだ。

「桔梗」

「ん？」

「この後、僕は一之瀬さんから呼び出されると思う」

「帆波ちゃんから？」

一之瀬は間違いなく僕に問うつもりだ。

自分の過去をどこまで知っているのかと。

「うん。おそらく二人で会うことになると思う」

「二人きり……」

「でも安心して。僕には桔梗だけだから」

「それはわかっているけど……帆波ちゃんは要に何の話があるの？」

「それは聴いてからのお楽しみだね」

「要のけちっ」

頬を膨らませ不満を示す桔梗。

そんな桔梗に悪戯しようと思った瞬間、僕のスマホが鳴った。

「帆波ちゃん？」

「だね」

一之瀬からのメッセージは簡潔なものだった。

『今から二人で話せないかな?』

僕はすぐに返信した。

『いいよ。どこで会う?』

『私の部屋でいい?』

『わかった。もう行っていいの?』

『いいよ。部屋は〇〇〇〇号室だから』

数回程度しか話したことがない男子を部屋に上げるのはどうかと思うけど、それほどまでに一之瀬は切羽詰まっているのだろう。

『それじゃ行ってくるね』

『うん、いってらっしゃい』

桔梗に軽く口づけを交わし部屋を後にした。

僕は一之瀬の階へ行き、ドアの前に立ち、チャイムを鳴らした。

「急に呼び出してごめん。入って」

「お邪魔します」

扉を開けた一之瀬は先ほどと同じ制服姿だった。

緊張しているのか手が震えている。



僕は案内された客用のクッションに座った。

そして画面を下に向けた状態でスマホを床に置いた。

「えつと……」

テーブルを挟んだ向かいに座る一之瀬が言いよどむ。

「桜庭くんのいところが私と同じ中学なんだよね？」

「そうだよ」

「うん……。それで、その……私のことも知ってたわけだよね？」

「うん」

もちろん僕のいところが一之瀬と同じ中学なのは嘘だ。

原作知識があるから一之瀬の過去を知っているだけだ。

「全部知ってるよ。一之瀬さんが半年も学校を休んだことも、万引きを犯したこともね」

「……そっか……」

僕の答えを聞いて一之瀬は俯いてしまった。

震えも先ほどより酷くなっている。

「どうしよう……どうしよう……」

中学で過ちを犯してしまった一之瀬。

一から——いや、ゼロからやり直そうと思って、自分の過去を誰も知らないこの学校

に入学した。

新たな友人に囲まれ、学級委員長としてみんなを引っ張っていた一之瀬。

だがそれらはもうすぐ終わりを告げようとしている。

なぜなら自分の過去を知っている人物が現れたから。

「一之瀬さん、安心して」

「……………え？」

「僕は誰にも言うつもりはないよ」

僕の言葉を聞いて一之瀬が顔をあげた。

その顔つきにCクラスの学級委員長としての面影はなかった。

不安。悲しみ。恐れ。そうした押し隠すことのできない幾つもの感情が混ぜこぜになつて、べったりと顔に張りついていた。

「……………本当に？」

「うん」

「でも……………」

「僕は事実を確認したかっただけだから」

僕は万引きを犯した過去を材料に一之瀬を脅すつもりはない。

「よかつたら聞かせてくれない？」

「なにを……?」

「一之瀬さんが過ちを起こした経緯を」

「……」

「僕は君が理由もなく万引きをするとは思えないんだ」

「思えないんじゃない。僕は確信している。」

「それは……買い被りすぎだよ……」

「そうかな?」

「そうだよ。私は……犯罪者なんだから……」

「自らを嘲るように目から口へかけて冷たい笑いが動く。」

「……やっぱり脅そう」

「え……?」

「君が万引きをした理由を教えて。じゃないとみんなにばらす」

「……それは卑怯だよ」

「僕は卑怯な男なんだ」

「ここで理由を言ってもらわないと先に進めない。」

「原作でも思ってたけど、一之瀬って面倒な女なんだと再認識した。」

「……わかった、言うね」

一之瀬はすべての過去を話し出した。

母親と妹と三人で質素に暮らしていたこと。高校に進学するために特待生になれるよう努力したこと。中学3年時に生徒会長に選ばれたこと。その夏に母親が過労で倒れたこと。それにより妹の誕生日プレゼントが買えなくなったこと。

そして——妹の笑顔を守るために万引きを犯したこと。

結局、妹はヘアクリップを母親に見せびらかせて一之瀬が万引きしたことが明るみになる。

それが僕の知る一之瀬の過去だった。

けれど違ったのだ。

この世界で彼女の過去が改変されていた。

一之瀬が万引きを犯したことを最初に知る人物は母親ではなく——同級生だった。たまたま面白い物に来ていた同級生に一之瀬は万引きを犯すところを見られてしまった。

そして通報されてしまった。

それも最悪な形で。

一之瀬の万引きを目撃した同級生は話したこともない男子だった。

その男子は店を出た直後に一之瀬に声を掛け——脅迫した。

一之瀬は頭が真っ白になった。

万引き行為が明らかになればすべてが終わると思つてしまった。

母親と妹が悲しむ。同級生からの信頼が失われる。特待生の話もなくなり高校に行けなくなる。

最悪の未来がよぎつた。

パニック状態の一之瀬は男子に言われるがままに彼の家についていった。

家についていけば何をされるかわかるはずだ。

けれど正常な判断能力を失つた一之瀬はその考えに及ばなかつた。

案の定、一之瀬は家上がった直後に襲われた。

男子のどす黒い欲望が一之瀬に襲い掛かつた。

押し倒されてようやく一之瀬は自分が何をされているのかに気付いた。

不幸中の幸いか、体格差があまりなかつたため、必死に抵抗した一之瀬は何とか彼の家から逃げる事ができた。

怒りに狂つた男子はすぐに警察と学校に通報した。

そのあとは原作と同じ。

家族を裏切り、学校に居場所を無くし、自責の念にかられた一之瀬は半年間も引きこもつた。

その後、担任からこの学校の存在を知らされ、一之瀬はリスタートすることにした。  
「……………これで私の話終わり」

原作よりハードな展開に僕は驚きを隠せなかった。

「あ、あのさ……………」

「なに？」

「その……………君を襲った男子はどうなったの？」

「それは……………」

強姦未遂は立派な犯罪だ。

いくら一之瀬が万引きを犯したからと言って、彼女を傷つけていい理由にはならないだろう。

「なんもないよ」

「……………は？」

それはどういう意味だろう。

罪に問われなかったということだろうか。

「……………もしかして黙ってたの？」

恐る恐る問うと、一之瀬はゆっくりと頷いた。

「なんで……………？」

「……罰だと思った。罪を犯した私への罰」

「罰って……」

「もちろん襲われた直後は思ってたなかったよ。でも逃げてる途中で思ったの……これは私への罰なんじゃないかって」

「そんなことは……」

「うん、ないと思ってる。でも私はそう思わないと自分がどうにかなりそうだったの……」

もしかして手が震えていたのは僕への恐怖心だったのかもかもしれない。

ファミレス、カラオケ、二人で帰った時はそんな様子はなかった。

異性と室内に二人きりでいると恐怖を思い出してしまうのではないだろうか。

「一之瀬さん、僕の手を縛る?」

「……いきなり何を言ってるの?」

涙目の一之瀬が汚物を見るような目で僕を見つめる。

「男と二人でいるの怖いんじゃない?」

「っ……」

「だから手を縛っておけば少しは安心できるでしょ」

「い、いいよっ! 友達にそんなことできないよっ!」

「でも……」

「大丈夫だから！」

「……ならいいけど」

「うん。……それよりよくわかったね。私が男性恐怖症だって」

「そりゃ手の震えと、あんな話を聞かされたらね」

「……そつか。でも軽度なんだよ。部屋で二人きりじゃなければ問題ないから……」

確かに症状が酷ければ共学の学校なんて通えないだろう。

「桜庭くんって優しいね」

「そうかな？」

「そうだよ。……桔梗ちゃんが羨ましい」

「それは買い被り過ぎだよ」

「ううん」

急に甘酸っぱい雰囲気になってきた。

僕の縛りプレイ要求で場が和んだのかもしれない。

「あの、それで、みんなには……」

「うん、約束通り誰にも言わないよ」

「ありがとう」



「よかつたら誓約書でも書こうか？」

「大丈夫。私は桜庭くんを信じてるから」

いくら過去話を聞かせたからと言って、会って間もない異性を信じちゃだめだと思  
う。

でも信じてくれるならありがたい。

遠慮なくその純粋な心を利用させてもらう。

「一之瀬さん、一つだけアドバイスをさせてもらうね」

「うん」

「おそらく君は自分の悩みを他人に打ち明けるのが苦手なんだと思う」

「……そうかもしれないね」

「だからなんでも打ち明けられる存在を作った方がいい。時間をかけてもいいから」

「なんでも打ち明けられる……？」

「そう。親友でも、恋人でもいい。君の悩みを共有してくれる存在がいれば少しは楽に  
なると思う」

個人的には綾小路がおすすめたよ。

「……ありがとう。できるかわからないけど……頑張ってみるっ」

「うん」

一之瀬の涙は完全に止まっていた。

これでしばらくは大丈夫だろう。

「あ、あのさっ」

「ん？」

「私に悩みを共有してくれる人が見つかるまでで……桜庭くん相談してもいいかな？」

つまり綾小路と付き合う前での代役か。

桔梗の嫉妬が気になるけど、ここは了承したほうがいいだろう。

「いいよ」

「ありがとうっ」

いつもの無邪気な笑みを浮かべる一之瀬。

そんな彼女に見送られ僕はスマホの通話を終了して部屋を後にした。

☆☆☆

「おかえり、要」

「ただいま。ちゃんと聞こえてた？」

「ばっちりだよ」

桔梗はスマホをかざしながら答える。

僕は一之瀬の話をも桔梗に聴かせるために桔梗と通話状態にしていたのだ。

「それより要は酷いね。帆波ちゃんに誰にも言わないって約束したのに」

「僕は誰にも言っていないでしょ」

「そうだけど……」

「ろくに確認もしないで過去を打ち明けた一之瀬さんが悪いんだよ」

僕は桔梗に隠し事はしないと決めている。

だから一之瀬との会話も桔梗に聴かせた。

「それでこれからどうするの？」

「一之瀬さんのこと？」

「うん。本当に脅したりしないの？」

「しないよ」

「ならなんで帆波ちゃんの過去を聞いたわけ？」

僕は一之瀬の過去を聞いた理由。

それは単純な理由だ。

「自分の過去を知る人物が学校にいることを知らせたかったからだよ」

「つまり？」

「これで一之瀬さんは不安を抱えて学校生活を送ることになる」

自分の過去をみんなに暴露されるんじゃないかという不安と恐怖だ。

「でも帆波ちゃんは要のことを信じて言ってたでしょ」

「そうだね。でも本当に僕を信じるのなら言葉に出さなと思うんだ」

「……確かに私は要のことを信じて言ってたことないかも」

「でしょ。一之瀬さんは僕を」信じてい」んだよ」

そもそも数回しか話したことがない異性を信じるなんてありえない。

「そういうことか。……要はやっぱり悪人だね」

「僕は善人でも悪人でもないよ」

原作の一之瀬と同じ台詞を言ってしまった。

「それに一之瀬さんは敵だからね。もし彼女が脅威になるなら……」

「なるなら？」

「その時は徹底的に潰すよ」

この時、僕は一之瀬を見誤っていた。

一之瀬帆波は僕が思ってた以上にか弱い女の子だった。

そして——精神的に脆い人間だった。

## ☆☆☆

たった一度の過ちで私は大切な家族の笑顔を奪ってしまった。

私は取り戻さなきゃならない。

そのためにこの学校に入学した。

私の過去を誰も知らないこの場所でやり直そうとした。

けれどそれはすぐに崩れ去ってしまった。

桔梗ちゃんの彼氏である桜庭くんが私の過去を知っていたのだ。

名前は聞かなかったけれどいここが私と同じ中学だったらいい。

私は頭が真っ白になった。

こんな状態になるのは○○○くんに犯されそうになった時以来だ。

あの時と同じように最悪の未来が私の脳裏によぎった。

この学校でも私の居場所がなくなってしまうかもしれない。

クラスメイトの笑顔を奪ってしまうかもしれない。

桜庭くんにも身体を要求されるかもしれない。

だったら——要求される前に私から身体を差し出せばいいのではと思ってしまっ

た。

そうすれば居場所もなくならない。

クラスメイトの笑顔も守れる。

乱暴されないうすむかもしれない。

今思うと愚かな考えだと思うけど、さっきの私は本気で考えていた。

でも私の愚かな考えは消え去った。

桜庭くんは誰にも言わないことを約束してくれた。

条件として私が万引きを犯した経緯を説明したけれど仕方ない。

何も言わずに黙ってもらうなんて虫がよすぎる。

私の過去を聞いた桜庭くんは優しい目で私を見てくれた。

それだけじゃない。

私が男性恐怖症であることも気づいてくれた。

手を縛るか聞かれたときは引いてしまったけど、あれは場を和ますために言ってくれ

たんだと今ならわかる。

なんて優しい人なんだろう。

それに私の欠点にも気づいてくれた。

確かに私は他人に悩みを打ち明けられず一人で抱え込んでしまう。

だから半年間も引きこもってしまった。

母親にも、友達にも相談できずに、ずっと自責の念に駆られていた。

この学校は普通の学校じゃない。

これからクラス同士の争いが増えていくだろう。

現にDクラスからは何度もちよつかいを出されている。

そのたびに私は悩みを抱え込んでいくと思う。

それが私の容量を超えてしまったら——私はまた壊れてしまうだろう。

だから私は桜庭くんをお願いをした。

私と悩みを共有してくれる存在ができるまで相談に乗ってほしい、と。

彼はすぐに了承してくれた。

もちろんずっと彼に甘えるつもりはない。

私が危うくなった時。

その時だけでいいから——私を支えてほしい。

話して数回の人にそんな想いを抱くなんて自分でもおかしいと思う。

桜庭くんは不思議な人だ。

彼には私の全部を見透かされているように思えてしまう。

桔梗ちゃんはそのなところに惹かれたのかもしれない。

「羨ましい……」

桔梗ちゃんとは彼とは幼馴染だと言っていた。

私にも彼がいたら。

桜庭くんが私の幼馴染だったら。

「万引きなんてしなかったのかな……」

過去を取り消すことは出来ない。

私は一生犯罪者として生きていかなければならない。

「そっだよ。私は犯罪者なんだから——罰を受けなきゃ」

私は裁縫箱から針を取り出す。

そして——左腕に突き刺した。

「っ……」

鋭い痛みが左腕から全身に伝わってくる。

針を抜くと針の跡から赤い血がにじみでてきた。

「あっ」

これは罰だ。

私は過ちを犯してから何度もこうして自分を罰した。

「ふうふう」



こうすると少しだけ自分が許されたような感覚に陥る。  
自傷行為なんて愚かなことだっけわかってる。

でもこうしないと私は壊れてしまう。

もう壊れるわけにはいかない。

私は学級委員長なんだ。

クラスメイトや先生からも信頼されてみんなを引っ張っていかないといけない。  
「悩みを共有してくれる人ができたら……こんなことしなくてもすむのかな……」  
そう思いながら、私は腕から床に垂れる赤い血を見つめていた。

## 10話 桔梗の本気

6月下旬。中間テストが終わって二週間が過ぎた。

僕たちBクラスは龍園率いるDクラスにちよつかいを出されることなく平和に暮らしている。

原作で暴行事件を起こす須藤にも部活以外でDクラスの生徒と関わらないよう注意しているので問題ないだろう。

このままいけば来月もBクラスをキープできそうだ。

「期末テストも勉強会を開こうと思うんだけど……どうかな？」

昼休み。僕は珍しく桔梗以外の生徒と共にしていた。

「どうもこうも開いた方がいいだろう」

平田の提案に幸村が同調する。

「そうだね。今回は過去問も期待できないし開いた方がいいと思うよ」

「勉強会を開かないと一夜漬けしかなない生徒も多そうだからな」

幸村の指摘はもつともだった。

原作で三馬鹿が一夜漬けで中間テストを乗り越えようとしていたが、堀北が勉強会を

開かなければ退学になっていたと思う。

「それじゃ今回も協力をお願いしてもいいかい？」

「ああ」

「もちろんだよ」

中間テストに続いて僕、平田、幸村の三人で勉強会を実施することが決まった。

池と須藤だけでなく、幸村も原作より成長が早くなっており、勉強に関してはエース級の働きをしている。

「それじゃ話も終わったことだし昼食を済ませよう」

「ああ。それにしても桜庭の弁当は凄いな……」

幸村が桔梗の手作り弁当を凝視する。

「そう？」

弁当のおかずは焼き鯖、味玉、豆苗と薄揚げのお浸し。パプリカーのソテーだ。

「健康的だと思うんだけど」

「いや、俺はハートマークになっている鮭を言ってるんだが……」

「これは桔梗の趣味なんだよ」

桔梗は毎日気合の入った弁当を作ってくれる。

再会して一ヶ月記念日なんか弁当のおかずがすべてハートマークになっていた。

「指摘されたら恥ずかしくなってきた……」

「いや、馬鹿にしたわけじゃないんだ。すまない」

「ううん。……平田くんは軽井沢さんにお弁当作ってもらわないの？」

「え、うん……。軽井沢さんは料理が苦手なんだ」

「そうなんだ」

彼女は尽くすタイプだから料理は得意そうだけどね。

本当の彼氏ではない平田に弁当を作るほどの気力はないのだろう。

昼食を済ませた僕は一足先に教室に戻った。

桔梗はみーちゃんたちと食堂に行っており、また教室には戻っていないようだ。

「堀北さん、期末テストも勉強会を実施することになったよ」

前の席に座る堀北に報告する。

「……そう。なぜ私に教えたのかしら？」

堀北は振り向かないまま問う。

「ただの情報共有だよ。クラスメイトだからね」

「情報共有に関して感謝するわ」

「うん」

「……何か言いたそうね」

「そんなことないよ」

僕に協力を拒まれた堀北だが、相変わらず僕と綾小路以外に話す生徒はいない。

ただお得意の毒舌も僕と綾小路にしか吐かないので、本性を知らない一部の男子からは孤独を好む美少女として人気があるらしい。

確かに容姿だけならトップクラスの美少女だろう。

「それよりお兄さんとは仲直りした？」

「あなたには関係ないでしょ」

兄の話題に触れられ機嫌を損ねた堀北は教室を出て行ってしまった。

「相変わらず仲が良いな」

堀北の隣人である綾小路が振り向いて言った。

「綾小路くん、それは皮肉かい？」

「いや、素直にそう思ったただけだ。オレでは堀北の感情をあそこまで揺さぶることは出来ない」

「そうかもしれないね。それより今日はジャン〇の発売日だよ」

「そうだな」

「帰りに漫画喫茶寄らない？」

「いいぞ」

転生前は毎週購入していたけど、この世界では漫画喫茶で読むようにしている。なぜなら漫画喫茶で読んだ方が安いからだ。

ジャン○の価格は税抜きで250ポイント。漫画喫茶は一時間で150ポイント。つまり漫画喫茶で呼んだ方が100ポイントもお得なのだ。

「ドクターストーリー○の続きが気になるんだよね」

「そうだな」

中間テストが終わってから僕は綾小路に興味として漫画を勧めた。

流行の漫画を一通り紹介したところ、ドクターストーリー○と鬼滅の○を気に入ってくれた。

「しかし櫛田は大丈夫なのか？」

「うん、桔梗も女友達とカラオケに行くようだから」

毎日僕にべったりだった桔梗も週に一回は女子たちと遊ぶようになった。

今日は一之瀬たちとケヤキモールに行くらしい。

「綾小路くんは誰かと進展あった？」

Cクラス女子との食事会で綾小路も全員と連絡先を交換している。

「特にないな」

「そっか」

原作だとまだこの頃は女子たちにドキマギしていた綾小路だが、巻数を重ねるにつれて性欲がないのではと疑うようになった。

11. 5巻で軽井沢と付き合うことになったけど、彼女を抱く綾小路の顔にはゾツとしたのを今でも覚えている。

「焦らず頑張るつもりだ」

「……頑張るの？」

「それなりにな」

綾小路は彼女作りではなく利用できる駒を作るのを頑張るんだろう。

「あまり女の子を悲しませちゃだめだよ」

「オレがいつ女子を悲しませたんだ？」

夏休み以降特定の女子を悲しませてるよ。

もちろんそんなことは言えず、冗談だと僕は言った。

☆☆☆

7月1日。入学してから3回目のクラスポイント発表日を迎えた。

起床してすぐに端末で確認したところ、7万8000ポイント支給されたのが確認で

きた。

つまりクラスポイントは780。

学校から中間テストを乗り切ったご褒美で1000クラスポイントを付与されたので、30クラスポイントが引かれたことになる。

「要、クラスポイント増えてるね」

「うん。あとはほかのクラスがクラスポイントをどこまで伸ばしているかだね」

おそらくこの数字なら一之瀬たちに抜かれることはないだろう。

うまくいけば夏休みの特別試験でAクラスに上がれるかもしれない。

僕は期待に胸を躍らせ登校した。

朝のショートホームルーム。茶柱先生は淡々とクラスポイントの発表を行った。

Aクラスは1004、ほかのクラスは僕たちより下だったため、今月も僕たちはBクラスとなった。

「今日もいい天気だなー」

ベランダに出た池が青い空をみあげながら平和をかみしめる。

そんな池の肩になぜかスズメが乗っている。

「また池くんの肩にスズメが乗ってるよ」

「池殿はバードテイマーだったでござるか」



網倉といい感じになってから池はさらに変わった。

まず笑顔が絶えないようになった。そのおかげかわからないけど、高確率でスズメな  
ど小鳥が池になつくようになった。

また毎日一時間の勉強もするようになった。ちなみに勉強するようになった理由は、  
僕が退学になったら網倉と離れ離れになると脅したからだ。

「カラスに襲われないように気を付けろよ」

可愛いスズメさんと会話をする池。

山内が面白がって動画を撮影し、池の株を落とすために網倉に見せたところ、逆に面  
白い人だと好感度を上げてしまったらしい。

池寛治は人生のピークを迎えていた。

☆☆☆

「今日は……んっ……綾小路くんと……あんっ……遊んだんだ？」

「うん」

時刻は19時。

桔梗より一足先に帰宅した僕はアニメ鑑賞をしながら彼女の帰りを待っていた。

夕食は桔梗から外食すると聞いていたので、漫画喫茶の帰りに綾小路とファミレスですませた。

そんな桔梗は帰つてくるとすぐに肉棒をせがんできた。

なんでもケヤキモールの多目的トイレから出てきたカップルを見て色々妄想を膨らませてしまったらしい。

「最近仲が……あああんっ！」

「仲がなに？」

全裸で開脚させられ、愛液が溢れる陰部を弄られる桔梗。

あまりの快感に会話がままならない様子だ。

「あっ♡んあっ♡ふあああっ♡」

淫穴を掻き乱すように手マンをしておしっこのようにびゅっびゅっ潮を噴いてしまう。

「あっ、ダメ、いくッ！ イっちゃうっ！」

「いいよ、派手にイきなよ」

桔梗を絶頂させるため空いてる左手でクリトリスをぎゅっど摘まんた。

直後に桔梗の身体が軽く痙攣した。

すると……

「あああああああんっ♡」

普段の桔梗からは想像できない品のない喘ぎが室内に響いた。

「派手にイッたね、桔梗」

「うあ……ひい……」

「少し休憩する？」

「し、しない……。早く……ちようだい……」

腰をヒクヒク震わせ、愛液を垂れ流している桔梗が懇願した。

「いいよ。それじゃ入れるね」

「……うん♡」

物欲しそうにヒクついていいる桔梗の淫穴に肉棒を一気に奥まで挿入した。

「んっはあああああああつ！」

「桔梗、声大きすぎだよ」

「だ、だつてえ……んにやつ!？」

愛液たつぷりの淫穴を肉棒で擦っていく。

刺激を与えるたびに桔梗は可愛らしい嬌声をあげる。

「他のカップルにそんな興奮しちゃったんだ？」

「う、うん……ひいんっ♡ だつてみんなが使うトイレで……あああんっ♡」

「ま、男女が多目的トイレに入ってたならやることは一つしかないだろうね」

あんな人が多い施設のトイレでセックスをするなんて……。

僕には到底真似できない行為だ。

「だ、だよね……。んくっ♡ ああっ♡ またイっちゃいそう……。うああっ♡」

「イクのは我慢してね。僕も一緒にイきたいから」

「そんなあ……。んはあっ♡ 無理だよお……。あヒイインっ♡」

確かにこのままピストンを続けければ桔梗はすぐに絶頂するだろう。

桔梗は蕩けきった表情で、力なく舌がだらんと垂れている。

「涎も凄いことになってるよ」

「ひゃっ、やめっ……。！」

垂れ流し状態の涎を指ですくって桔梗の顔に塗りつぶす。

「桔梗のこんな姿を見たらみーちゃんたちは離れていくだろうね」

「そんなこと言わないでえ……。んふああっ♡ ああああっ♡」

「ごめんごめん。意地悪しすぎたね」

桔梗に謝罪し、お詫びとして腰の動きを速くする。

「うああっ♡ 激しいっ♡ 要、激しいよおっ♡」

「激しくするけどイクのは我慢するんだよ」

「む、むりいつ♡ 絶対、むりだからあつ♡」

かぶりを振りながら必死に耐える桔梗。

僕は容赦なく快感を与え続けた。

腰を動かすたびに大きく揺れる豊満な乳房。

これ以上はないほど勃起している乳首とクリトリス。

弱点である可愛らしいおへそ。

すべてのスポットを延々と責め続けた。

何分責め続けたわからない。

桔梗はシーツを握りしめ、大粒の涙を流し、歯を食いしばって必死に快樂に耐えている。

「ぐっ……うっ……ふうううっ……！」

桔梗は僕に従順だ。

絶頂するのを許可しない限り桔梗は限界まで必死に耐え続けるだろう。

「ふうっ……ううう……んん——！」

歯を食いしばりすぎたのか、気づくと唇から赤い血が垂れていた。

懸命に耐える桔梗をもう少し見たかったけどそろそろ頃合いだ。

「桔梗、イっていいよ。僕もイきそうだから」

いったんピストンを停止し、桔梗に絶頂する許可を与える。

「……………つ。ほんとお……………?」

「うん」

「じゃあ……………」

「うん、すぐにイかせてあげるね……………!」

互いに絶頂するべくペニスを膣奥まで突き入れる。

「あうああああああつ♡」

押さえつけるような正常位で、激しく腰を打ち付けてペニスを激しく出し入れする。

出し入れするたびに、桔梗は仰け反って大きく嬌声をあげる。

「ひっ、はあんっつ♡ んはあつ♡ んお……………♡」

「桔梗、そろそろイクよ……………!」

「あひいつ♡ んおおおつ♡ うあああつ♡」

やっぱり桔梗のだらしない顔を見ながら抽送するとすぐに絶頂しそうになる。

すぐに射精感が最大限までに高まる。

「出すよ……………!」

とろとろの膣内に大量の精液が注入されていく。

「あゝああああああああああつ♡」

怒涛の勢いで最奥の子宮へ白濁液が流し込まれる刺激に桔梗も絶頂を迎えた。

「あつひいいいっ♡ 熱いっ♡ あああつ、すごいよおっ♡」

桔梗は子宮に精液が溜まっていくことに歓喜の声を上げ続けた。

☆☆☆

「あんっ♡ だめっ♡ またいつひやうっ♡」

二時間が経過した。

桔梗は四つん這いになり、大きなお尻を突き出した状態で、快樂のままに膣穴を犯されていた。

今日の桔梗は激しかった。

昼休みに松下、佐藤と親しく会話をしていたのが気に入らなかったのかもしれない。

桔梗は嫉妬するほどに性欲が増していく。

何度も何度も絶頂させられているのにも関わらず、子宮を精液で満たすと、すぐに次を求めてくる。

「あ、ああああつ♡ イグっ♡ またイグうううっ♡」

「桔梗、はしたなさすぎるよ！」

恥も外聞もなく下品な声を上げる桔梗。

僕は戒めるため、安産型のお尻を叩く。

「んにいいいいいいいいっ♡」

けれど桔梗は喜悦の声をあげるだけだ。

ヒステリックなほど感じまくり絶頂する淫猥な桔梗に僕は驚きを隠せないでいた。

「桔梗って、本気で乱れるこんな風になるんだね……」

「うあぁ……ご、ごめんなさ……わたひい……」

僕に引かれたと思ったのか、桔梗は振り向いて悲し気な表情を見せる。

「で、でも……要がほかの女のこと仲良くして……るからぁ……」

やっぱり松下、佐藤と仲良くしていたのが原因だった。

「ううん、怒ってもないし、引いてもないから安心してよ」

「……本当に?」

「うん、現に僕のおそこは硬いままでしょ」

「……うん」

もちろん戸惑ってはいるが、下品な姿を見せられても、桔梗の魅力は変わらない。

「それじゃ再開しようか」

「うんっ♡ はやくちようらいっ♡」



いつの間にか止めていた抽送を始める。

「ひゃあああんっ♡」

この日。

僕と桔梗はセックスの最長時間を更新した。

桔梗はお風呂から上がると髪も乾かさずにすぐに眠りについてしまった。

## 11話 夏の憂鬱

久しぶりに予知夢を見た。

内容は酷いものだった。

人気がない場所で少女と青年が言い争っている。

やがて激高した青年に押し倒され少女は性的暴行を受けてしまう。

場面が変わりおそらく寮の屋上。

性的暴行を受けた少女は泣きながら屋上から飛び降りてしまった。

そこで僕の意識は覚醒した。

「なんて夢を見たんだ僕は……」

非常に目覚めが悪い朝になってしまった。

「どうしたの？」

制服にエプロン姿の桔梗が心配そうに顔を覗き込む。

「嫌な夢を見てしまったね」

「そっか。大丈夫？」

「大丈夫だよ。心配してくれてありがとね」

「ううんっ」

頭を撫でると桔梗は布団の中に潜り込んできた。

「今日も抜いてあげるね♡」

「よろしく頼むよ」

すっかり朝の日課になった桔梗のフェラチオ。

「んちゅっ……ぢゅるっ……」

桔梗はいつも美味しそうに僕の愚息をしゃぶってくれる。

一度だけフェラ直後の桔梗とキスしたけど、あまりにも精液が苦くて吐きそうになった。

それからフェラした後に桔梗とはキスをしていない。

「んぶう……あ、ぐっ……」

桔梗は指示しなくても喉奥まで愚息を受け入れる。

そして時間が経つにつれて、強く口をすぼめて吸うように抜く。

「ぢゅぶぶっ！ んぐうっ！ んぼおっ！」

桔梗の鼻の下が伸び、顔が歪む。

彼女の綺麗が顔を変に歪めることに興奮を覚えてしまう。

「桔梗、もう出る……！」

桔梗の頭を掴み、自ら腰を動かして、絶頂に向かう。

「おぶっ！ ん ん っ！」

「くっ……………」

桔梗の口内に、大量の精液が注ぎ込まれる。

「んぶあ……………♡ おぶう……………♡」

恍惚な表情を浮かべて、美味しそうに精液を飲んでいく桔梗。

「美味しいの？」

「んっ♡」

桔梗は嬉しそうに頷く。

「ならいいけど」

僕には精液の何が美味しいのかまったく理解できない。

けど桔梗が幸せそうなのでよしとしよう。

☆☆☆

「おはよう」

今日も僕たちBクラスは平和だ。

平田はみんなに笑顔を振りまいてるし、池は小鳥と会話をしているし、須藤は英語の教科書を読んでるし、幸村はクラスメイトに勉強を教えてるし、綾小路は何を考えてるのかよくわからない。

いつもと変わらないBクラスの日常だ。

ただこの平和なBクラスで日常が脅かされている生徒がいる。

「おはよう、佐倉さん」

佐倉愛里。

物語の当初はヒロインポジションだった美少女だ。

「あ、桜庭くん。おはよう」

人見知りが激しい佐倉だが、僕とは笑顔で挨拶を交わす仲になった。

これもめげずに毎日挨拶をした結果だ。

「今日も一日頑張ろうね」

「う、うん」

佐倉は原作2巻でストーカーと対峙することになる。

原作では綾小路と一之瀬が彼女を救ったが、この世界では悲惨な結末を迎えることになる。

予知夢で自殺をした少女。

それが佐倉愛里だ。

このままでは佐倉はストーカーにレイプをされて自殺をしてしまう。

そんなバッドエンドは回避しなければならない。

「佐倉さんは夏服買わないの？」

「ポイントがもつたいないから。それに学校はどこも冷房が効いてるし」

「確かにそうだね」

佐倉を死なせるわけにはいかない。

なぜなら——彼女は生前の親友が好きだったヒロインだからだ。

親友が知らないこの世界でも、僕が佐倉を見捨てたら、彼は悲しむと思う。

だから僕は全力で佐倉愛里を救う。

「桜庭くんも衣替えしないの？」

「しないよ。理由は佐倉さんと同じ」

「そっか」

「うん。それじゃまたね」

「うん」

佐倉に別れを告げて自席に座ると、仲良くお喋りをする綾小路と堀北の姿があった。

「今日も仲が良いね。まるで夫婦みたいだ」

「桜庭、何を言ってるんだ？」

「それは幻覚よ。あなたはクスリでもやってるのかしら？」

息もぴったりじゃないか。

綾小路は僕と堀北の方が仲が良いと言っていたけれど、綾小路と会話をしてる方が堀北は楽しそうだ。

あれだけ暴言を吐けば当たり前だろうけど。

「そろそろ先生が来るよ。静かにしたら？」

「お前がからかってきたんだろ……」

「あなた、本当にいい性格をしてるわね……」

僕に呆れた二人は大人しく前を向いた。

放課後。僕は桔梗と二人で寄り道もせずにもっすぐ寮に帰った。

「要、あれ」

「ん？」

桔梗が指を指した先にはポストに手紙を入れている男性の姿があった。

男性は僕たちの存在に気付くとそそくさと去っていった。

「あの人が手紙を入れてたのって佐倉さんのポストだね」

ストーカーは愛の手紙でも入れていたのだろうか。

しかしあいつがポストに投函したのを目撃できたのはラッキーだった。

これで佐倉に探りを入れるきっかけを作れた。

「なんか気持ち悪い人だったね」

「そうだね。ストーカーだったり？」

「佐倉さん、可愛いもんね」

「桔梗の方が可愛いよ」

「知ってる♡」

僕に褒められてご機嫌な桔梗。

「……でも佐倉さんが可愛いのは否定しないんだ？」

「っ……………」

前言撤回。

やっぱり桔梗は地雷がわからないから怖い。

☆☆☆

私は中学三年までグラビアアイドルの仕事をしていた。初めは自分が変われるきっかけになればいいと思った。



確かに仕事中の私は変わったかもしれない。

グラビアアイドルの雫は明るく元気な女の子。

それがファンみんなの印象だと思う。

でも本当の私は違う。

人付き合いが苦手で、相談事ができる友達も一人もいない。

だから私はここまで苦しんでいる。

グラビアアイドルの仕事に疲れた私は全寮制のこの学校に入学した。

ただファンとの繋がりは断ち切れなくて、ブログに毎日自撮り写真をアップロードしていた。

でも最近ブログの更新が滞っている。

理由はストーカーに悩ませているからだ。

始まりは私がデジカメを購入するため家電量販店に行つてからだだった。

おそらく対応してくれた店員さんに私が雫だと気づかれたんだと思う。

その日からブログに気持ちが悪いコメントが投稿された。

それだけだったらまだよかった。

私はストーカーに住所を知られてしまった。

デジカメを購入した際に、延長保証の申込書に住所を記載した。

私の住所を知ったストーカーは毎日大量の手紙をポストに投函している。

今日も15通入っていた。

中身は怖くて見ていない。

「なんでこんな……」

学校から寮に帰るまでの道のりが怖い。

食材を買い出しに行くまでの道が怖い。

いつストーカーに襲われるかわからない。

事務所の先輩がストーカーに襲われる事件が発生したことがある。

自宅の玄関先で待ち伏せされ、そのまま暴行を受けたらしい。

その先輩は精神を病んでしまって、事務所を退社してしまった。

愛情と憎しみは紙一重だ。

もし私のこのストーカーの歪んだ愛を拒絶すれば、尋常ないほどの憎しみを向けられると思う。

そうになったら私は先輩のように襲われるかもしれない。

怖い。

誰か助けてほしい。

でも私には悩みを相談できる友人が一人もない。

先生に相談して物事を大きくしたくもない。

ストーカー被害に遭った女だとみんなに知られたくない。

知られたら絶対変な目を見られてしまう。

「だったらどうすればいいの……」

このままストーカーの影に怯える生活を送らないといけないのか。

そんな私の精神が持つわけがない。

だから誰か助けて。

私の心が壊れる前に誰か。

「……一人だけいるかも」

こんな私に毎日笑顔で挨拶をしてくれる人。

彼ならもしかして……。

☆☆☆

「桜庭くん、今日は桔梗ちゃんと一緒じゃないの？」

昼休みの屋上。一人でお弁当を食べていると一之瀬がやって来た。

「桔梗は友達と食べてるよ」

「ふうん、そっか」

「一之瀬さんも一人？」

「うん。……実は桜庭くんと桔梗に相談があつて二人を探してたの」

「僕たちに？」

「一之瀬の相談事つてもしかして白波からの告白だろうか。」

「少しだけ時間くれるかな？」

「いいよ。昼飯食べながらでいいなら話を聞くよ」

「ありがとう」

僕が承諾すると、一之瀬は僕の隣に腰を下ろした。

やや距離が近いような気がするけど気のせいだろう。

「それで相談事つて？」

「うん。実はクラスメイトに告白されちゃって……」

「そうなんだ」

原作と違つてすでに告白されているのか。

「いきなりでびっくりしたら返事は保留にしちやっただけ……」

「その表情から察するに付き合うつもりはないんだね？」

「……うん」

「なら断ればいいんじゃないの？」

「そうだけど……相手は親友だと思ってる子だから傷つけたくなくて……」

「親友？」

「相手は女子なんだ」

相手は白波千尋で間違いないようだ。

「そっか」

「女の子に告白されたの初めてだから……どうすればいいかわからなくて……」

「なるほどね」

「桜庭くん、どうすればいいかな……？」

一之瀬は潤んだ瞳で僕を見つめる。

頬が紅潮しているのは暑さが原因だろうか。

「例え相手が傷ついても断るしかないと思うよ」

「……そうなの？」

「相手も傷つくのを感じのうえで告白していると思う。だから一之瀬さんはそれに応えないといけない」

「応える……」

「変に嘘をついて溝を深めるより、自分の気持ちをまっすぐ伝えたほうがいいと思うよ」

「……そっか、わかった。頑張ってみるね」

ありきたりな答えになってしまったけれど、一之瀬は納得してくれたようだ。

「桜庭くんに相談してよかった」

「そう?」

「うん。……また何かあったら相談してもいいかな?」

「僕でよければ」

「ありがとう」

その日の夜。一之瀬からメッセージが届いた。

白波からの告白を断ったこと、しばらくくしくしくするかもしれないけど元の関係に戻れるよう頑張る、とのことだった。

「ふうん。帆波ちゃんって女子にもモテるんだね」

一之瀬のメッセージを見た桔梗は興味なさげに言った。

「みたいだね。桔梗は知ってた?」

「薄々ね。帆波ちゃんたちと遊んだ時に、千尋ちゃんが異常なまでにべったりしてたからね」

「なるほど」

「要は女子同士とか気持ち悪いと思ったりしないの?」

「しないよ。百合は嫌いじゃないし」

転生前に親友が教えてくれたゆるゆるの影響だろう。

もちろんラブコメの方がジャンルとしては好きだけど。

「桔梗は？」

「私は要以外興味ないから♡」

「……そっか」

「そこはもつと嬉しがってよ」

「ごめんごめん」

頬を膨らませて不満げな桔梗を宥める。

「それより佐倉さんはどうするの？」

「明日学校に来てたら話しかけるよ」

本当なら今日中にストーカー事件を解決したかったが、佐倉が学校を休んだため、何も進展がなかった。

「私も協力するからね」

「頼りにしてるよ」

「うんっ♡」

桔梗には佐倉がストーカーに困っているなら助けていと相談している。

間違いなく佐倉はストーカー被害にあっているのに、断言できないのが痛いところだ。

「それじゃお風呂入ってくるね」

「私も入るっ」

こうして僕は風呂場で桔梗にたつぷりと絞られた。

まさか二時間も浴室にこもることになるとは思わなかった。



## 12話 ストーカー

翌日の放課後。僕は下駄箱で佐倉に声をかけた。

「佐倉さん、ちよつといいかな」

「う、うん……」

僕は佐倉の了承を得て、人気のない体育館裏に彼女を連れ出した。

「さ、桜庭くん、どうしたの？」

「実は佐倉さんに聞きたいことがあったんだ」

「私に？」

「うん」

僕は一昨日に佐倉のポストに青年が手紙を投函しているところを目撃したことを伝えた。

「佐倉さんとその男性がどういう関係なのか気になって」

「ここでストーカーではないかと問い詰めたりはしない。」

佐倉から打ち明けさせないといけない。

クラスメイトに悩みを打ち明ける。

それだけで佐倉の成長に繋がるはずだ。

「そ、それは……」

僕から目をそらして言いよどむ佐倉。

「もし言いにくかったら言わなくていいよ」

「わ、私……」

さすがに悩みを打ち明けられるほど僕はまだ信頼されていなかったか。

そう思った瞬間、佐倉が口を開いた。

「その人にストーカーをされてて……」

本人から言質をとれた。

あとは僕がストーカーを撃退すれば解決だ。

「ストーカー?」

「うん。実は私——」

佐倉は自身が元グラビアアイドルであること、家電量販店でデジカメを購入した際にその青年に住所を知られてしまったこと、ブログに気持ち悪いコメントが書き込まれること、大量の手紙がポストに投函されていることを打ち明けた。

「そうだったんだ」

「うん……」

「先生には相談しなかったの？」

「お、大事にしたくなかったから……」

「そっか。……わかった、なら後は僕に任せて」

「え……？」

佐倉は僕の言葉を聞いてきよんとんとしてしまう。

「僕がストーカーをやつつけるから」

「で、でも……！」

「大丈夫。こう見えて僕はそれなりに強いんだ」

「迷惑じゃ……」

「迷惑だなんて思っていないよ。佐倉さんは大切なクラスメイトだからね。困ってたら助けるのは当然でしょ」

「……助けてくれるの？」

「うん。僕は君を助ける」

「っ……」

佐倉がきれいな瞳から大粒の涙が流れた。

原作ではあまり気にしなかったけど、ずっと恐怖を感じていたんだろう。

誰にも相談できず、一人で耐えていたのだ。

「ご、ごめんなさい……。泣いちゃって……」

「うん。大丈夫？」

「もう大丈夫」

「ならよかった。それじゃストーカー撃退作戦を考えようか」

「うんっ！」

作戦は単純なものだ。まず佐倉がストーカーを呼び出す。ストーカーの連絡先は手紙に書いてあったので、捨てアドから呼び出すことにした。

あとは僕がストーカーを精神的にも肉体的にも説得させるだけだ。

念のため佐倉の護衛として綾小路も協力を仰いだ。

「こんな感じで進めようと思うんだけど……。どうかな？」

「桜庭さんに全面的に任せます……」

「そう？」

「うん」

「桔梗はどう思う？」

「いいんじゃないかな。要なら瞬殺でしょ」

場所は変わり僕たちは自室で話し合いを行っていた。

桔梗に隠し事をしないと決めている僕は佐倉の了承を得てから桔梗に今回の件を報

告した。

「そうだね」

「怪我だけはほしないでね」

「もちろん」

幼馴染の桔梗は僕が武道を嗜んでいたことは当然把握しているようになっていた。

「な、仲良いんですね……」

桔梗がいるため敬語になっている佐倉。

「だって恋人だもんっ♡」

佐倉にアピールするように桔梗が腕に抱きついてきた。

今日もおっぱいの感触が柔らかくて最高だ。

「佐倉さんは恋人いないの？」

「え!?!」

桔梗の質問に慌てふためく佐倉。

「い、いいんです!」

「そうなんだ。芸能人だしモテたんじゃないの？」

「学校のみんなは私が雫だって知らないの……」

「雫だって知らなくても十分魅力的だと私は思うよ」

「あ、ありがとうございます……」

どうやら佐倉は桔梗が苦手なようだ。

桔梗も珍しく必要以上に絡んでいる。

「そ、それじゃ私はこれで……」

話し合いが終わり佐倉はそそくさと帰っていった。

作戦の結構は明後日だ。

明日は綾小路に相談して協力を得られたら最後に打ち合わせを行う。

☆☆☆

二日後。佐倉に呼び出されたと思っている青年は大勢の男子に囲まれていた。

「ひっ……」

青年の顔が恐怖でひきつる。

仕方ないだろう。

美少女に呼び出されたと思ったら、10人近い男子がいたのだ。

(なんでこんな大勢になってしまったんだ)

僕が直接依頼したのは綾小路だけだ。

偶然僕たちの会話を聞いてしまった池が信用できる生徒に報告したらしい。

その結果、僕と綾小路以外に、池、須藤、平田、幸村、三宅、沖谷、神崎、アルベルト、鬼頭がこの場にいることになってしまった。

違うクラスである三人は池と友達らしい。

神崎は彼女の網倉を通じて知り合い、アルベルトと鬼頭はバードウォッチング同好会の仲間だそうだ。

池のコミュカが半端ないことになってる。

Bクラスが一番の武器は綾小路の存在ではなく、池のコミュカかもしれない。

「あなたが佐倉さんにストーカー行為をしていることは把握しています」

「うっ……」

「今後、佐倉さんに近づかないでください」

「ぼ、僕と雫は赤い運命で結ばれているんだ！」

恐怖に打ち勝ち、青年が歪んだ愛を叫んだ。

「そうですか。なら仕方ないですね」

忠告したのに聞き入れてもらえない。

ならば無理やり聞かせるしかない。

「待てよ、桜庭」

「……池くん？」

僕が一步踏み出そうとした瞬間、池が僕の肩を掴んだ。

「いくらストーカーが相手とはいえ、直接暴力を振るつたらクラスポイントが減るかもしれないだろ」

「何かいい考えでもあるの？」

「ああ」

池はそういうと、口笛を吹いた。

するとカラスの鳴き声が聞こえ始める。

「な、なんだ!？」

青年は怪しげな雰囲気にもまれてしまう。

「いけー!」

刹那。カラスが青年を襲い始めた。

「や、やめろ! やめてくれ!」

カラスの強烈なつき攻撃に青年は為す術もない。

「どうだ! 佐倉に近づかないと約束するか!」

「する! するからやめてくれ!」

「よしー!」





時刻は22時。

あれから僕は佐倉と桔梗に解決したことを報告した。

佐倉は涙を流して感謝の言葉を述べていた。

佐倉を助けるために集まった11人の精鋭たちは友情を深めライオングループを作る  
ことになった。

(そういえば山内がいなかったな。とうとう池にも見限られたか)

山内哀れなり。

彼女持ちの池にいつもやつかんでいるから見限られても仕方ないだろう。

「そうなの?」

「池くんが解決してくれたようだものだよ」

僕は池の活躍を詳細に説明した。

池は鳥と会話するだけでなく、従えて人間を攻撃できるまでなったようで、その事実に  
桔梗が恐怖に震えていた。

「す、凄いな……」

「そうだね」

そんな池とは近々ダブルデートをすることになっている。

なので桔梗も池とは今後も絡むことになっていく。

「麻子ちゃんは大丈夫かな？」

「大丈夫じゃない。なんか面白がってるみたいだし」

「そ、そうなんだ……」

網倉麻子は面白い女子だ。

池が小鳥を会話するようになって、遠ざかるどころか、ますます親交を深めて、ついには付き合うようになった。

「そろそろお風呂入ってくるよ」

「うん」

「一緒に入る？」

「今日はエッチまで我慢する！」

「そっか、残念」

「ごめんね。それと要がお風呂に入ってる間に自室に戻るね」

「忘れ物でもしたの？」

「ちよつとね」

そういい、桔梗は自室に帰っていった。

☆☆☆

「そっか、そっか……。要は何もしなかったんだ……」

要は佐倉のストーカーを撃退するためにいろいろ動いていた。

最終的に池がストーカーを撃退したらしい。

「池くんのくせに役立つんだね」

彼のおかげで要が傷つくことがなかった。

これで要が傷ついていたら私はストーカーと佐倉を許さなかった。

佐倉愛里。

私の要に助けを求めた根暗女だ。

「……ざけんなっ！」

あの女は明らかに要に気がある。

要を見つめるあのアバズレを見てすぐにわかった。

「全く勘違いしやがって……！」

要は誰にでも優しい。

今回はたまたま佐倉が困っていたから手を差し伸べただけ。

それなのにあの女は……。

「死ね死ね死ね死ね死ね！ B級グラドルのくせに私の要に色目を使うな！」

どうせ助けられた後はあの下品な乳を使って要を誘惑するつもりなんだ。でも残念。

要には私がいる。

要は私の身体に夢中だ。

私は要のちんこなしじや生きられない身体になってるけど、要も私のまんこなしじや生きられない身体になっている。

だから要に色目を使っても無駄。

要は私の身体があれば十分。

確かに佐倉や一之瀬の胸は私より大きい。

けどそれだけだ。

胸以外だったら私が全部勝ってる……はず。

だから要は私を選んでくれた。

これからもいろんな女が要に言い寄ってくると思うけど、要は私以外の女なんて眼中にない。

「要♡ 要♡ 要♡ 要♡ 要♡ 要♡ 要♡ 要♡ 要♡ 要♡ 要♡ 要♡」

要の部屋に戻ったら私は押し倒されるだろう。

一緒にお風呂に入りたがってたから、私の身体が欲しくてたまらないはずだ。

「ごめんね、要。せっかくお風呂に誘ってくれたのに断っちゃって」

でも私は悪くないんだよ。

悪いのは佐倉。

私に余計なストレスを与えた根暗女がいけないんだよ。

要に抱かれる前に余計はストレスは抜いておきたかったの。

だから叫んだの。

「でも、その分私の身体を好きにしていいいからね」

今日はどんなことをされるんだろう。

要はおっぱいが好きだから、おっぱいを虐めながらたくさん突かれちゃうのかな。

それともオナホールのようにイラマチオされちゃうかも。

どっちでもいいや、

要が私の身体で気持ちよくなってくれたらどっちでもいい。

「ああ………♡ かなめえ………♡」

要に抱かれる自分を想像しただけであそこが疼いてきた。

でも我慢しないと。

もう少し経てば要のおちんぼが私を貫いてくれるから。

私はあそこの疼きに耐えながら愛しの彼の部屋に戻った。